

41785

教科書文庫

4
810
41-1926
200030
2012

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

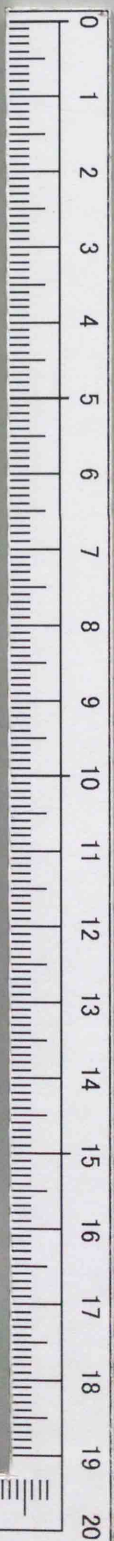
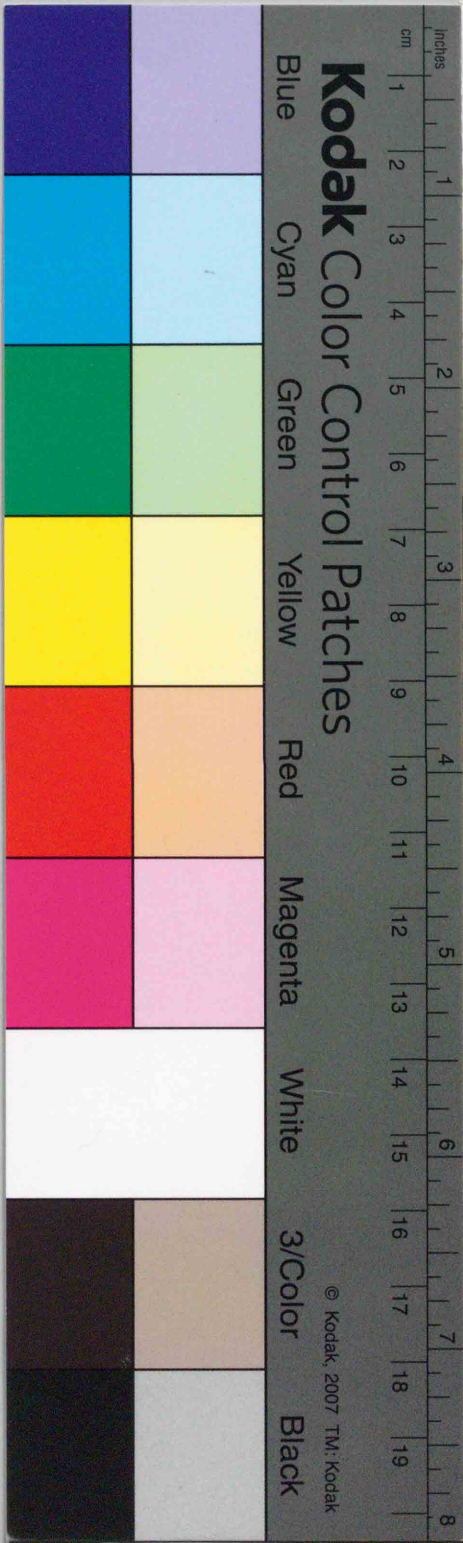


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



學 中
書 科 教 文 國
二 卷

教
4
20



教科書文庫
4
810
41-1926
2000302012

資 料 室

375.9
Y019.

文部省檢定
大正十五年二月十日
中國國語教科書用

吉田彌平編

中國文教科書

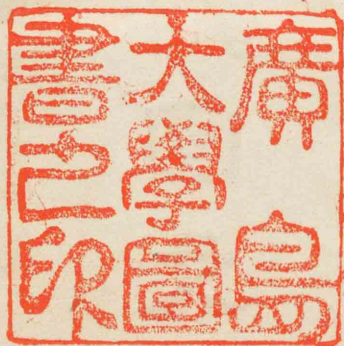
卷二

東京 光風館藏版

広島大学図書

2000302012





中國文教科書卷二

目次

一	月の天橋	……	徳富健次郎	一頁
二	湖と里	……	……	七
一	青い湖水	……	三木露風	七
二	里の夕暮	……	柳澤健	九
三	鞍馬の火祭	……	志賀直哉	一〇
四	海上より	……	水上瀧太郎	一五
五	三都物語	……	鶴見祐輔	二四

目次

六	思ひ立つ日が吉日	幸田露伴	三
七	伊能忠敬	幸田露伴	三
八	小さな旅人	薄田泣菫	四
九	雀の生活	北原白秋	五
一〇	母と蘆	西條八十	五
一一	保津川下り	徳富健次郎	六
一二	大阪城	澁川玄耳	七
一三	眞田幸村父子	〔名將言行録〕	六
一四	八道の山	大町桂月	五
一五	山狩	坪内逍遙	六
一六	果物の趣味	正岡子規	一〇

一七	柿二つ	高濱虚子	一三
一八	子規の面目	安倍能成	一三
一九	文鳥の死	戸川秋骨	一六
二〇	三浦路	川上眉山	一三
二一	ペンギン鳥	杉村廣太郎	一六
二二	シベリヤの旅		一五
二三	浦潮より	太田覺眠	一三
二四	奉天占領の日	澁川玄耳	一六
二五	春待つ心	相馬御風	一七
二六	故山の風光	若山牧水	一〇
二七	月雪花		一七



中國國文教科書 卷二

一月の天橋

徳富健次郎

猪一郎(兄)

あたまや青雲
わしや白雲上
わが身は氣まこじ
空を飛ぶなり

自然と人生
徳富健次郎
號は蘆花
文學者
明治元年熊本縣
生

ぎいと艫が響いて、舟は墨染の濃い松陰から、白々とした月下の海に出た。海と云つても浅い洲の水である。何といふ好い月夜か。雲一つ無い空にのみ照るかと思へば、水中に天あつて、其處にも月は璧の如く光つて居る。何といふ清い水だらう。月明にも水底の砂が分明に數へられる。此處は橋立明神の渡か。若しくは銀河をいま渡つて居る

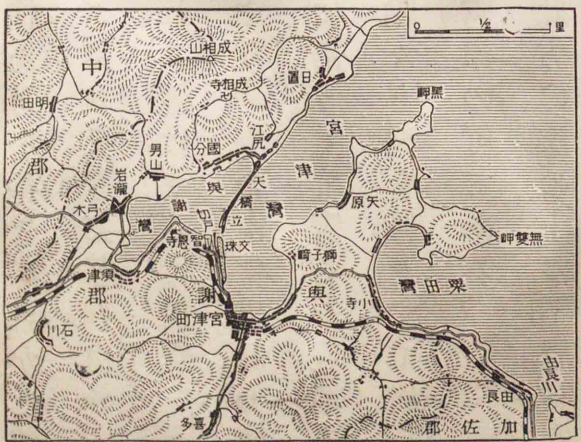
のではあるまいか。船頭よ、ゆるやかに舟をやつてくれ。もつと徐かにやつてくれ。しかし如何程徐かに舟をやつても、彼岸は近い。するくと舟はもう天橋の渚に着いてしまつた。

舟からあがつて踏む白砂は、もう天橋立である。此處らは植ゑついで間もないと見え、松は若松で、疎らである。月光に雪とか、やく砂を踏んで段々奥へ入つて往く。歩むに連れて松影は段々深くなり、果ては月の光より松の影が多くなつた。

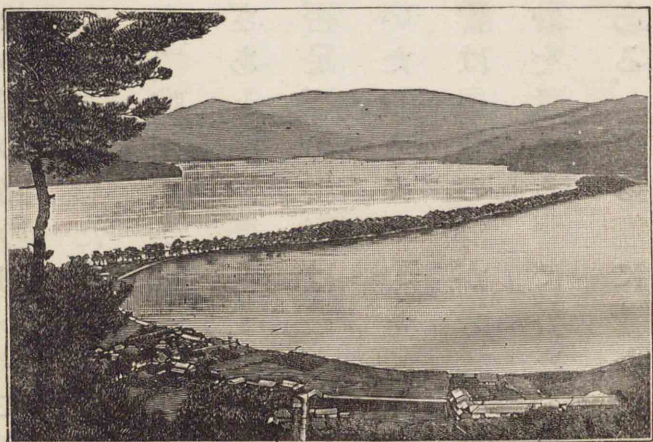
何といふ明るい月だらう。仰げば松の一片々々が白金のピンを數ふる如く讀まれ、俯く砂にはまた一片々々の影が

黒く鮮かに讀まれる。

松の間の路の曲る處に來た。余は松の幹に倚つて立つた。ひつそりした天橋立に人籟絶えて、唯何處からともなく、ざあざあといふ響がする。松風か。否、足下の松影は濃い墨もて描いたやうに少しも動かぬ。音響は與謝の海が天橋一里の白砂を舐める響に外ならぬのである。其の響に惹かれて汀に出て見る。其の處に二間ばかりの花崗石のベンチがある。



腰をかける。月下にほの白く眠る與謝の海。其の懷には



天橋立

壁の様な月を抱き、寐息かとばかり、ざぶり又ざぶり、と白砂にこぼれる漣は、まるで眞珠をこぼすやう。海の南に、半圓形に山根に沿うて紅寶石や琥珀の光が點々と灣を縁どつて居るのが宮津の町である。

ふと此方の海の上に不思議なものが現れた。晃々とした明珠の幾段にも並んだ、老大な横長い物である。龍宮城の出

現。と見る間に、それは宮津の方へ動いて行く。やゝ暫く其の行方を見送る。龍宮城は彼の宮津灣頭百千の龍燈晃めく邊にぴたりと附いてしまつた。龍宮城と見たは、それは今日の最終の連絡船が宮津を指して行くのであつた。あとは唯慰したやうな與謝の海。照りまさる月の空と靜かに相見て相抱き、一里の松原枝も鳴らさぬ天の橋立の長い汀に沿うて、ざぶり又ざぶりと漣がさゝやくばかりである。汀から松原に戻つて、奥へくと砂路を歩む。さくくと砂を踏む足音の絶間に、波のさゝやきが慕うて来る。幽かに蟲の音がする。松影は益々深くなつて、はては砂の上にこ

ぼれる月影がちらく〜と螢ほどに細く疎らになつた。と見ると、こゝにひつそりと鎮ります社がある。大方橋立明神といふのであらう。松影を浴びた其の宮に人影もない、人聲もない。燈明一つ點つて居ない。余は其處の松に倚りかゝつて良久しく立つた。

大分經つて、松影から外に出て歸途に就いた。砂路をまたぶらり〜と切戸の渡に來た。切戸の水は全く銀河のごとく美しい。汀に立つて向ふを見れば、眞黒い彼岸に唯一つ赤い燈が見える。文殊の渡守の小舎の燈である。

「おうい〜」。

渡を呼ぶ余の聲が震へて銀河を渡る前、余は月の天橋の端

に立つて、暫く其の燈を眺めて居た。(死の蔭に)

二 湖と里

一 青い湖水

三 木露風

三木露風
名は操
一時羅風と號し
詩人
明治二十二年兵
庫縣龍野町生

落葉林を出て來たら、

湖水の水が光つてた。

青い〜水の色、

舟は一つも浮んでない。

舟は一つもないけれど、

青い〜水の色。

ジョンの目の色、土耳其色、
水姫が梳く髪の色。

お供のジョンは水浴びに、
じゃつぶくと泳いでる。

嗚呼眞青な秋の空、
じゃつぶくと水の音。

ジョンよ來い、ジョンよ來い。
林の中から見てもよう。
いつまでもく。

あの眞青な水の上を。(炎天)

二 里の夕暮

柳澤 健

柳澤 健
詩人
大使館三等書記
官
明治二十三年福
島縣若松市生

峠三里の上り下り

やつこらやつと來は來たが、

目ざした町のもし火が

見えないうちに日が暮れた。

お宮の屋根には親の鳩、

落葉の上には子の小鳩、

ほろくほろり、ほろくり。

啼いてるうちに日は暮れた。

路は小暗し、あかりは持たず、

落葉かさく、悲しく寒く、

ため息つけば、ほろくろり

鳩の啼く音に月が出た。(柳澤健詩集)

火祭や

三 鞍馬の火祭 志賀直哉

十月二十日過、私は二三人の友達と鞍馬へ火祭といふのを見にいつた。日の暮京都を出て、北へくと幾らか登りの道を三里ほど行くと、遠く山の峽がほんのり明るく、その邊

志賀直哉

文學者

明治十六年宮城

縣石巻町生

鞍馬

京都府愛宕郡鞍

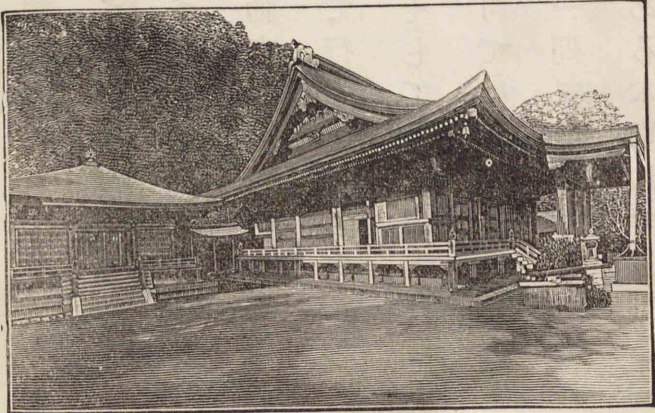
馬村

山中に鞍馬山寺

がある

一帯淡く烟の立ちこめてゐるのが眺められた。苔の香を嗅ぎながら、冷えととした山氣を浴びて行くと、この奥にさういふ夜の祭があることが不思議に感ぜられた。子供づれ友づれの見物人が提燈をさげて行く。それを時々自動車の前、森や山の根に強い光を射つけながら追ひぬいて行く。山の方からは五位鷲が啼きながら飛んで来る。そして行くほどに、幽かなくすぶり臭い匂がして来た。町では家ごと軒前に、といつても通が狭いので、道の真中を、一列に焚火が並んでゐた。大きな木の根や人の脊丈ほどある木切れで三方から圍ひ、その中に燃えてゐるのが、何か岩間の火を見るやうな一種の感じを起させた。

焚火の町を出ぬけると、稍、廣い場所に出た。幅の廣い石段



鞍馬寺本堂

があつて、その上に丹塗にの大きな門があつた。廣場の兩側は一杯の見物人で、その中を下帶一つに肩だけちよつとしたものを着て、手甲、脚絆、草鞋がけに身を固めた向ふ鉢巻の若者たち、柴を束ねた藤蔓で巻いた大きな松明を擔いで、最澄祭禮——これは本當ではないが、ちよつとさう聽きなされる掛聲をしながら、兩足を踏張り、右

最澄

高僧

天台宗の開祖

勅諭傳教大師

弘仁十三年(八四二)

三寂

年五十六

へ左へよろけつゝ、上手に中心を取つて歩いてゐる。或者はよろける風をして、わざと群集の前へ火を突きつけたり、或者は家の軒下にそれを擔ぎこんだりした。火の燃え方が弱くなり、自分の肩も苦しくなると、一抱ほどあるその松明を不意に肩から外し、どさりと勢よく地面へ投げおろす。同時に藤蔓がはじけて柴は開き、火は非常な勢で燃上る。若者は汗を拭き息を入れてゐるが、今度は又別の肩にそれを擔ぐ。それも一人ではとても上げられず、傍の人から助けてもらふのである。

この廣場を抜け、先の通へ入ると、そこにはもう焚火はなく、今の松明を擔いだ連中が「最澄祭禮」と聞える掛聲をして、狭

い所を往きかふ。子供は年相當な小さい松明をわざと重さうによるけながら擔ぎ廻る。町全體が淡く烟り、氣持のいゝぬくもりが感ぜられる。

星の多い澄渡つた秋空の下で、かういふ火祭を見る心持は特別だつた。一筋の低い軒並の裏は、すぐ深い溪流になつてゐて、そして他方はまた高い山になつてゐるといふやうな處では、いくら賑はつてゐるといつても、その賑やかさの中には、山の夜の静けさがしみ透つてゐた。これが都會のあの騒がしい祭より外知らぬ者には大變よかつた。そして人々も一體に眞面目だつた。「最澄祭禮」この掛聲の外には大聲を出す者もなく、酒に酔ひしれた者も見かけられな

かつた。しかもそれはすべて男だけの祭である。或家で裸體の男が軒下の小さな急流に坐つて眼を閉ぢ、手を合せ、長いこと何か口の中で唱へてゐた。清いつめたさうな水が乳のあたりを波打ちながら流れてゐた。大きな定紋のついた、變に暗い提燈を持つた女の兒と、無地の麻帷子を展げて持つた女が軒下に立つて、その男のあがるのを待つてゐた。漸く唱言を終へると、男は立つて、流の端に揃へてあつた下駄を穿いた。帷子を持つた女が濡れた體に黙つてそれを着せかけた。男は提燈を待たず、下駄を曳き、ずつて、すぐ暗い土間の中へはいつて行つた。これはこれから神輿を擔ぎに出る男だといふ。

かういふ連中が間もなく廣場の石段下に大勢集つた。そこには二本の太い竹に高く注連繩が張渡してあつて、その注連繩を松明の火で焼切つてからでなければ、誰もその石段を登ることが出来ないとのことだ。しかし繩は三間よりもつと高いところにあつて、松明を立てゝも、その火はなかなかそこまでは届きさうにない。澤山の松明がその下に集められる。その邊一帶、火事の時のやうに明るく、一緒に早くその焼切れるのを仰向いて望んでゐる群集の顔を赤く照し出してゐた。

やがて漸く火が移り、繩が火の粉を散らしながら二つに分れ落ちると、眞先に拔刀を振翳した男が、非常な勢で石段を駈登つて行つた。群集はさけび聲をあげながらすぐそれに續いた。しかし山の門にもう一つ、それは低く、ちやうど人の丈よりちよつと高いくらゐに第二の注連繩が張つてある。先に立つた拔刀の男はそれを振翳したまゝ、駈抜ける。注連繩は自然に切れる。そして群集は坂路を奥の院までそのまま、駈登るのである。

「どうだい、もう歸らうか。」と私は友を顧みて言つた。

「お旅でやるお神樂を見て行かうよ。」

神樂といふのは、四五人で擔ぐくらゐの大きな松明をいくつか、神樂の囃子に合はせて、神輿のまはりを擔ぎ廻るのである。

お旅
神輿のお旅

「大概もうわかつたぢやないか。」

「何時だ。二時半か。」

時計を見ながら友達がいつた。

「これで京都へ歸ると、ちやうど夜が明けるかも知れませ
んよ。」

と、もう一人の友達がいつた。

焚火の町では、来る時岩間の火のやうに見えてゐたのが、今
は盛に燃えてゐた。町を出ると、急に山らしい冷気が感ぜ
られた。私たちは時々振返つて、明るい山の峽を見た。道
は往きより近く思はれ、下りて樂でもあつたが、やはり皆は
段々疲れて、無口になつた。

「睡くてかなはん。」

と一人が言つた。

「僕が腕を組んで行つて上げるから、眠りながら行き給へ。
もう一人がさういつて、二人腕を組んで歩いた。

京都へ入る頃は、實際友達がいつたやうに、叡山の後ろから
しらとくと明けて來た。(暗夜行路)

四 海上より

水上瀧太郎

十月三日。日本に通じる無線電信は今晚でおしまひだと
電信局の人が注意に來てくれた。

カウカイブジ

叡山

比叡山

京都の東北、山
城と近江の境に
ある名山

水上瀧太郎

本名阿部章藏

文學者

會社員

明治二十年東京

生

十月

大正元年九月二
十八日に横濱を
出帆して北米カ
ナダに航した海
上の一日

といふやうなのがいくつも繰返されてゐるのである。自分も父母を喜ばせるために、何か一言いひ送らうと思つたが、無事といふ以外にいひたい事は何もなく、さりとして、たゞ無事といふだけでは、あんまり物足りなさ過ぎるので、手帳を出して、あれこれと近頃の自作の歌の中から適當なのを選ばうと思つた。

桂園派

景樹の流れを汲んで和歌を詠まれる母は、自分達兄弟姉妹が、時折父母の家を離れて旅にでも出た時とか、或は母自身が家を留守にされた時に、必ず吾等に對して子を思ふ親の心を三十一字に籠めては書いてよこされるのであつた。見やう見眞似で、兄も姉も、幼い時から歌を詠み習ひ、母から

景樹

香川氏

號は桂園

徳川時代後期の

名高い歌人

天保十四年(三三)

三歿

年七十六

送られた時には返しをするといふ風であつた。自分も何時かそれに倣つて、旅好きの身の旅先から、強ひても母の好きさうな古風な歌を詠んでは書送るのを習とした。

丁度此の夏も、自分は自分の拙い歌を拙い文字で認めた行く先々の驛路の繪葉書の、がいかばかり母を慰めるかを思ひ、又知る人の訪ひくるまゝに、いかに母がほこりに人々の前にそれを示されるかを想像しながら、九州路の旅に日を暮した。

しかし、今自分の手帳には旅の歌が一首もなく、船に来てからも、時折は、切れぐに浮ぶ想を歌はうとつとめはしたけれど、どういふものか、どうしてもそれがまとまらないので

あつた。且書きとめたその切れトの思想は、いづれも故郷を去り、父母の家を離れて、心の嬉しさ氣安さを思ふといふやうな意味の句ばかりで、それが鉛筆の痕鮮かに目に映るのである。「父母の家を離れし氣安さを旅に知る身もはかなかりけり」といふのが、そばに疑問點をつけたまゝ、纒かに纏りかけた一首であつた。

けれども自分が父母に送るべき歌はそんなものではない。成るべく心配させないやうに、海上の平穩なことを知らせ、併せて父母の家を片時も忘れないといふ意味を含ませなければならぬ。幾度もくゝ短いありふれた句を手帳に書いては消し、書いては消したあとで、あれこれとつな

ぎ合せて、漸く左の一首にまとめあげた。

ヤスラカニ、ウミノイクヨハアケニケリ、

チ、ハ、ノイヘコヒシトオモヘド。

自分はその電報が丁度父の寢酒の時刻に我が家に着くやうに、無線電信掛の人に頼みこんで、それで今日は一層安らかな心になつた。

父は近頃頓に量の少なくなつた酒に陶然としながら、なんだ、つまらないといふやうな顔をして見られるに違ひない。しかし、その心中の嬉しさは、隠さうとしても隠しきれず、見ないやうな風でゐながら電報の歌を諳んじられるにちがひない。母はもうたまらなくなつて、目さきに涙をにじま

せながら、幾度もくく口ずさんだ後、妹にも、弟にも、さては女中たちにまでも讀聞かせられるにちがひない。明日からは、彼の家の夫人、その家の奥さんたちに逢ふ度毎に、我が子の歌を唇にのぼせられるにちがひない。自分にはそれがよく見えるのであつた。(海上日記)

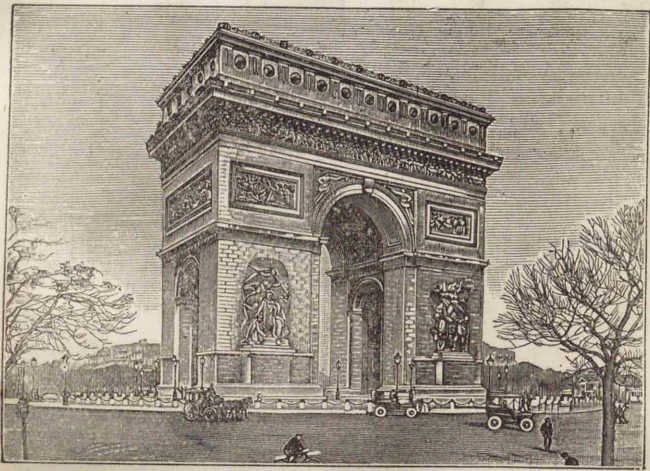
五 三都物語

鶴見祐輔

フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な國民である。併し其の勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉それ自身に本質的の差がある譯ではないけれども、英佛人の勤勉性の差は單に外形上の相違だけではない

鶴見祐輔
前鐵道省書記官
明治十八年群馬縣生

パリ Paris



巴里凱旋門

會に於て著しく眼に着く。

それは、都會は其の國の國民性

ではあるまいか。然らば其の國民性は如何に相違して居るだらう。こんな事を考へながら、私は一人でよくパリの公園をぶらついた。そしてこれにアメリカを今一つ加へて、三國の國民性を比較して見た。

一國の特色はその國の大都

ニューヨーク

New York

ロンドン

London

を最も鮮かに映し出してゐるからである。多くの人はニューヨークは餘りに歐洲化してゐるといふ。しかしニューヨークに一日居ると、我々はアメリカの空氣が全身に躍動するのを意識せずにはゐられない。ニューヨークはやはり米國である。そしてロンドンは英國であり、パリは佛國である。恰も東京が日本であるやうに。

朝早くパリの街を歩くと、石の舗道の上には、もう綺麗に打水がしてある。凱旋門のあたりの廣場には、花賣の露臺が幾つともなく立並んで、新聞賣の小舎と共に心地よい朝の活動を象徴してゐる。黒い質素な着物を着た女たちが、耳(シンボル)に快いフランス語で笑ひ興じながら忙しげに花に水を灌

いだりなどしてゐる。



倫敦市街

の日常生活を考へた。そしてフランス人とは種類の違ふ

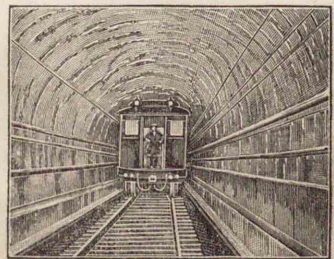
ロンドンの下町に晝頃行くと、狭い側道の上に、商館や銀行などの書記かと思える若者が、帽子も冠らずに、何百人となく忙しげに往來してゐる。私はこの群の中を縫ふやうにして歩きながら、遠いアフリカや印度の貿易を机の上でやつてゐるこの人々

クールバン
Coulevain
(—1915)
佛國の女流
小説家

この人々の勤勉さをも考へた。こんな時には、いつもフランスの小説家クールバンの言葉が胸裡に閃いた。「佛國は蜜蜂のやうに勤勉に、英國は蟻のやうに精勵である」と。パリとロンドンとの生活を見てあるうちに、この言葉の深い意味が日一日と自分の頭腦に深く沁みていつた。晴渡つた初夏の日盛りに、寸刻の休もなく花から花へ蜜を求めて翔つて行く可憐な蜜蜂の勤勉が、いかにもよく佛國人の心持を表して居り、來るべき冬の支度の爲營々として重い餌を引摺つて行く健氣な蟻の精根が、いかにもよく英國人の勤勉を表してあるやうに思はれた。それならば、米國人のあのいらくした忙しさは何に譬へられようかと考へて

淺草の觀音堂
淺草區淺草公園
にある金龍山淺
草寺
天台宗
本尊は觀世音菩
薩

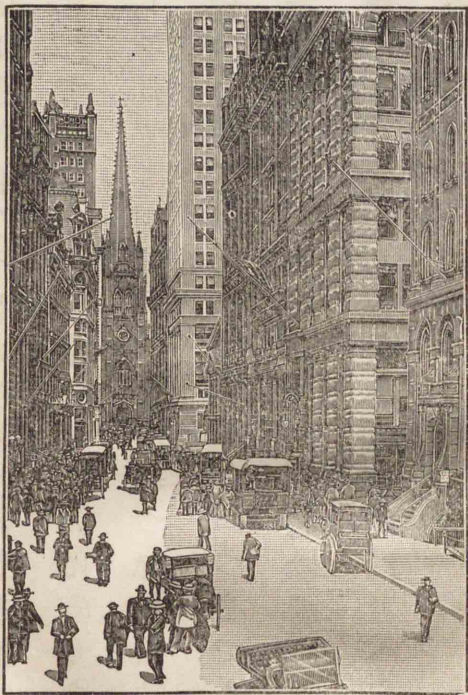
見た。私の頭の中に、ふと淺草の觀音堂の鳩が浮んで來た。いつ行つて見ても、大勢の人込の中で、幾十百羽の鳩が我劣らじと押合ひへしあひ、地上の豆を拾つて居る。物音に脅されて飛立たうと、半分氣を外に配りながら、それでも眼前の豆粒は一つでも餘計に食べようと、眼の色を變へていつまでも餌を拾つてゐる。米國人の勤勉は正にこの鳩のやうに餘裕がないと、私には考へられた。



地下鐵道

朝の出勤時間頃にニューヨークの地下鐵道に乗る人々は、これが此の世ながらの阿鼻叫喚ではないかと思はれるや

うな雑沓を目撃する。或日私は汽車の切符を買ひに市内
營業所に行つた。大勢の客が群集してゐた。係の若い米



街市ルオウクリョウニ

上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかと呆氣に
とられて見てゐると、忽ちくわつと手を紙の上に落して、す

國人が私の行先
と乗るべき列車
とを聴取り、やが
て右手の袖をち
よつと捲り上げ
て、鉛筆持つその
手を切符の紙の

るすると切符の文字を眼の廻るやうな早さで書終へた。
たゞ今手を振つたのは結局手に運動をつける爲だつた。
私は噴き出すやうなをかしさを感じた。なにもさう手に
運動をつけないでも、大して時間に相違もなく字が書けよ
うし、又運動をつける時間だけ無益のやうな氣がした。
その翌年、私は英國の商務院の鐵道局に賃金の一覽表を貰
ひに行つた。すると係の若い英國紳士が、「たしかこの机の
中に一枚だけ統計表を入れて置いたはずだ」といつて、自分
の机の引出を開けた。私は見るともなくその中をのぞき
こんで見て、驚いた。まあ、なんといふ多数の書類だらう。
累々と種々な紙片が堆積されてある。それを件の若い紳

Typist
タイピスト

士は手を突つこんで、がさ／＼と搔廻して、「こゝにはない」といつて、次の引出、又その次の引出を開け、そして最後の引出の底から、やつと見つけ出した。「これは差上げるわけにはいかないから、こゝで見て下さい」といふから、「一度見ただけではとても覚えられませんね」と答へると、ちよつと當惑して、「それでは私が寫してあげませう」といつて、それを別な白紙に筆寫し始めた。ニューヨークならば、傍にゐる若い女のタイピストに命じて、一分間に寫させるところだが、件の若い紳士は、まづ自分の机の上の大きな吸取紙の上に原本の統計表を置いて、その上に白紙を當て、書出した。私はちよつと面喰つた形で、この異様な淨寫法を見てゐた。す

ると、彼は白紙を左手で持上げて、下の原本をのぞいて、次の行の數字を謄記して、又白紙をその上にべたりと置いて、謄記しただけ書いて、又前のやうに紙を持上げて、原本をのぞいて、又その上に重ねて書いた。不思議な遣方だと思つてゐると、やがて書終へた。インキが乾いてゐない。そこで、今度はその紙と原本と二枚持上げて、下敷になつてゐる吸取紙の上に裏向に置いて、丁寧にインキを拭取つて、さて私にその淨寫したのをくれた。ニューヨークから着いたばかりの私は全く呆氣にとられて、こゝを出て行つた。そして幾回となく鉛筆持つ手を振つて運動をつけて、猛烈な勢で切符の文字を書いた米國人と較べて考へて見た。

その春、パリの郵便局に書留小包を出しに行つた。慣れな
 い私は、誤つて受取人欄へ自分の住所・姓名、差出人の欄へ先
 方の住所・姓名を書いた。これを局の小窓から差出す時、私
 はふと氣づいて、「おや」といふと、局員の佛國人が、つとペンを
 取つて、受取人といふ字を抹消して差出人と書き、差出人と
 いふ字を抹消して受取人と書いた。なるほどこれで送票
 は完成したわけである。しかもそれがほんの一瞬間だつ
 た。私は全く感服してしまつた。そしてニューヨークの
 切符賣とロンドンの役人とパリの郵便局員とを頭の中で
 列べて見た。鳩と蟻と蜜蜂と。 (三都物語)

六 思ひ立つ日が吉日

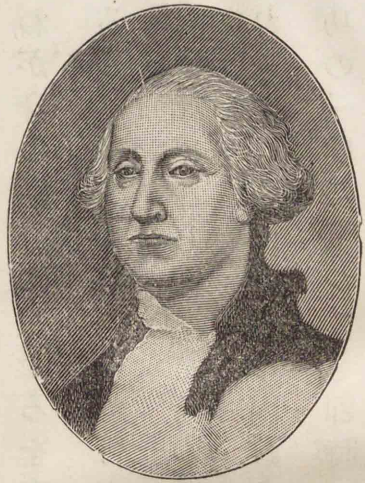
「思ひ立つ日が吉日」とは成功の秘訣を教へたる名言なり。
 思ひ立つやがてその事に取りかゝれば、興味涌くがごとく、
 わが身の勤勞に服せるを忘れて、たゞ快樂を取れるを覺ゆ
 るのみ、従つて事業の進行も自ら速かなり。もし、思ひ立つ
 日に始めざらんか、當時の興味は索然として消失し、他日こ
 れを始むるに非常の困難と苦痛とを感ずるのみならず、成
 功の一段に至つても即時に着手したるところに劣ること
 を免れざるなり。

ウォルター・ローリーは僅少の時間を以て多くの事を成し
 たる人なり。その秘訣を問へば、即ち曰く、「何事にも、なさ

ウォルター・ローリー
 Sir Walter Raleigh
 (1552-1618) 英國の軍
 人航海家
 探險家

明日ありと思ふ
明日ありと思ふ
心のあだ櫻よは
に嵐の吹かぬも
のかは(親鸞の
歌といふ)

夜中



ワシントン

ねばならぬことは、直ちにこれをなすにあり」と。あゝ、これ語淺くして意深きものにあらずや。世の失敗者を見よ、多くはこれ明日ありと思ふ心のあだ櫻、夜半の嵐に吹拂はれて茫然自失せるものにあらずるはなし。鐵は熱せられてなほ紅きうちに打つべし、枯草は太陽の輝きををる間に乾かすべし、事は時機を失はずして始むべし。古より大人と呼ばれ豪傑と稱せられし人は、大抵みな分陰を惜みて機會を捉へし人なり。時を誤るものは責任を誤るものなり、斷じて世間の信用を

ワシントン
George Washington
(1732-1799) 米國第一
領代の大統

フランクリン
Benjamin Franklin
(1706-1790) 米國の政
事家

ネルソン
Horatio Nelson
(1758-1805) 英國の海軍
提督



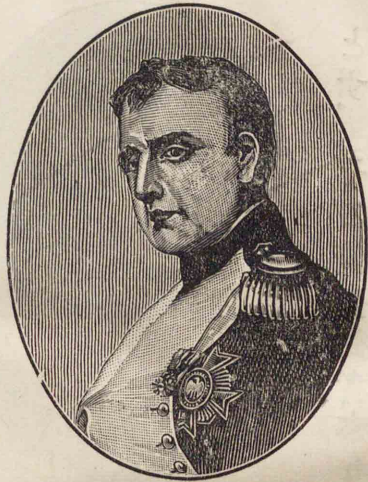
フランクリン

受くることなし。ワシントンの書記、一日遅刻せり。辯疏するに、己が時計の後れたるを以てす。ワシントン直ちに告げて曰く、「汝は正確なる時計を買ふべし。さなくば、予は他の書記を備ふべきのみ」と。フランクリン常に遅刻勝なる奴僕を笑つて曰く、「善く辯解する人は役に立たぬ人なり」と。ネルソンある時軍艦に乗らんとす。その前夜、御者來りて「明朝正六時に馬車をまはすべし」といふや、彼は曰く、「それより十五分前に來るべし。一定の時より十五分前にあるは予が予たる所以なり」と。ナポ

ナポレオン
Napoleon Bonaparte
(1769-1821) 佛國の皇

伊能忠敬

地理學者
天文學者
上總國武射郡小
堤村神保貞恆の
第三子
下總國香取郡佐
原町伊能氏を嗣
いだ
文政四年(二四
八一)歿
年七十七
幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士
慶應三年(五二)
江戸生



ナポレオン

レオン、一夕諸將を晚餐に招く。期に及んで諸將尙來らざりければ、彼は一人にてその食事を始めたり。將に食卓を離れんとする頃諸將の漸く來れるを見て點頭して曰く、諸君、食事の時間は既に終れり。請ふ、各自の職務に服せん」と。倒置法
凡そ時間を大切に守るは、勤勉の習慣を生じ、責任を盡し、義務を重んずる所以にして、身を立てる基なり。(立身策に據る)

七 伊能忠敬

幸田露伴

忠敬年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家をその子景敬に譲るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意専心、たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も圓滿に、最も美はしく果さん事を期し居たりき。
凡そ才氣ある者の常として、己が欲せざることには一舉手一投足の勞をも惜み、單に己が欲することのみ身を委ねんとするは免れがたき習なり。たとひ己が欲せざることなりとも、その爲さざるべからざることなる以上は、甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へて、わが爲すべき事をなすは、その人當に才氣あるのみならず、亦實に徳量ある人なりといふべし。世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある

人は少なし。年少くして才のみ優れたるは譬へば鋭き刃の肉薄きが如し、物を截ることはよくすべし、折るゝ恐は免るべからず。されば世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は數へも盡しがたし。忠敬が算數、曆術の學を嗜み、且これをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし。といふを唯一の希望として、三十餘年一日の如く只管その家業に丹誠したるが如きは、實にその徳量の大なるを見るべきなり。



(藏氏能伊町原佐) 敬 忠 能 伊

かくの如くにして伊能家は興りぬ、景敬は家を嗣ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は是に於て圓滿に果されたりといふべし。忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふることを得べし。この時は忠敬年既に五十歳、常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も前途多望なる青年の春なり、爲すある人には、如何なる場合もわが力を試みるべき所たり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當つて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせ

老いん

り。後の爲すあらんと欲する者苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。

さるほどに、忠敬はその郷里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一様に笈を負ひて郷關を出で、都門に遊びて師を尋ね學に就くところの書生と異なるところは、たゞその若きと老いたるとの差のみ。かくして忠敬は身をおのが好める學に委したるが、おのが満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。をりから幕府には曆法改正の舉ありて、これがため特に大阪より高

筆蹟

來月初高田迄相
回候様仕度奉存
候是迄隨身の
の共無病に而安
心仕候測景御用
向之儀御觸御聲
掛の(多)何方
にも差支無之誠
以難有仕合に奉
存候追々猶可奉
申上候恐惶
九月八日
伊能勘解由
高橋尊師

橋作左衛門といふものを召されたり。作左衛門、東岡と號す、算數曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして東岡は三十二歳なりき。普通の人情にては、おのれより年若き人に會ひては、たとひおのれが學業などその人

書月朔高田迄相
回候様仕度奉存
候是迄隨身の
の共無病に而安
心仕候測景御用
向之儀御觸御聲
掛の(多)何方
にも差支無之誠
以難有仕合に奉
存候追々猶可奉
申上候恐惶
九月八日
伊能勘解由
高橋尊師

伊能勘解由

高橋尊師

(墨遺芳流) 蹟筆 敬忠 能伊

に及ばずとも猶強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが
習なれども、徳量ある忠敬は争でか眞に敬ふべき學識ある
人に向ひて拜伏するを厭ふべき、喜びてそれが門下生とな
れり。然れども、同門の學生等は師たる東岡の若くして弟
子たる忠敬の老いたるをば屢、笑柄となしたりといふ。
晩學の難きは、實に何れの世にありてもかゝる事實の存す
るがためなり。是を以て、非凡の士にあらざれば、大抵自ら
恥ぢて師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱
いて墓穴に入るに至るなり。本來の上よりいへば、老いて
學ぶはたま〜その志の淺からざるを顯すのみ、また何の
不可かあらん、況やまた何の恥づべきところかあらん。思

ふに區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於てはたゞ蛙鳴蟬噪を
聞くが如くなりしなるべきのみ。かゝれば忠敬と同門學
生との優劣勝敗は比較するまでもなく明かなることなり。
忠敬の學術はさながら堤防の決潰して洪水の押寄するが
如き勢を以て歩を進め、終にその學の蘊奥を極めて、東岡門
下に肩を比すべきものなきに至れり。

かくて忠敬が始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得し
たる學術を實地に運用する機に際したるは、實にその年五
十五歳の時なりき。五十五歳といへば人は頽齡用ふるに
堪へずとする年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛さながら
壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて喜色滿面に溢れ、即

目にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの元氣勃々として燃ゆるが如き熱心を胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟早老の人種なりといふ、是豈我に伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。（露伴叢書）

八 小さな旅人

薄田泣菫

私たちが七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちがそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎ

薄田泣菫
名は淳介
文學者
新聞記者
明治十年岡山縣
連島町生

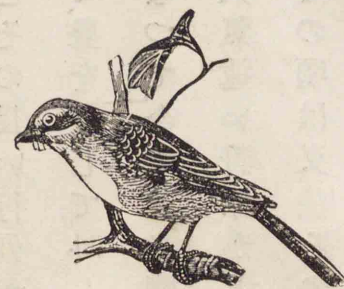
ながら

雁よ、棹になれ。

棹になつたら、鈎になれ。

と、その長い行列が次第に雲の中になじみこんでしまふまで、聲を嗚して叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少なくなつて、今では晝間その長い列が空を渡ることは、よくく人氣遠い野原かどこかでないと、滅多に見られなくなつた。その頃は又、後ろの岡に行つて見ると、葉の落ちかゝつた雑木林に小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥といふと、私は海などを越えて來る彼の小さな旅人のあわたゞしい旅を考へて、いつも言はうやうのない淋しい旅心地を覺える。

まづ百舌鶇伯勞が来る。秋の彼岸が過ぎてそろ／＼日影が黄色が
かつて来ようといふ頃、私たちはどうかすると暖い日の
午過、そこらの木立で甲高い鋭いその聲を聞くことがある。



百舌

「あゝ、もう秋だな」と思はず振返つて見ると、矮小な櫟にまじつて、ずばぬけて丈の高い榆の木に百舌が一羽止つて、黄色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきら／＼して
みる。私たちはその瞬間、言はうやうのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覚える。
次には鶉ひたひが来る。山家の午過、だるさうな蟋蟀こはむらの聲もいつ

の間にか止んで、枯葉一つ寝返を打つ音までがはつきりと耳に入る静けさの底に、どこやら窶れた人の溜息とでもい
つたやうな微かな聲が洩れて来て、何の音ともわからない。
すると、樹蔭の萋畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫がひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝チヤガから、枯葉のやうな小鳥が
がついと身をそらして逃げていつてしまふ。
それが鶉だ。
鶉といつたら、まるで悲哀を抱いてゐる人のやうに、大抵は連に離れてたゞ獨りて出て来る。そしてそこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよくり



鶉

ひよくりと軽い御辭儀をして、さゝやくやうな聲でうたひ出す。私はそれを見ると、他の爲、世の中の爲といつたやうなわけがなく、自分一人の爲にうたつて、それで満足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。



雀 十 四

鶉が來てものゝ十日も経たぬ間に四十雀白鳩、鴉が來る。この鳥は鶉と違つて十羽も二十羽も群をなして來る。山から里へ移る折などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そしてそこらの木立におりるなり、めまぐるしいほどすばしこく、雀の甕どなどを啄きまはしながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見せて、銀の鈴

をふるやうな透通つた聲で早口にしゃべり續ける。で、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない、灰色の産毛そのまゝの雛兒が交つてゐて、どうかすると高い枝に止り損ねて、もんどり打つて宙に返ることもあるが、そこは又慣れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で樹肌のひゞを啄いたりする。まるで山家育ちの、すばしこい、きさくな魂そのものを見るやうな氣持がする。

小雪がちらつく頃になると、鶉鶉が來る。これは鶉と同じやうに大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして來る。冬の初の午過、山近い田舎の小家で、爺は炬燵に

潜り込んで、こくりくと居眠をする。その側で婆さんはせつせと糸車を繰つてゐる。檐に吊した干菜の影が煤けた障子に見すぼらしく映つて、時をりちつぽけな小鳥の影が、ちらついたりする。どうかして糸目が切れて、睡さうな



鶯

錘の音がぱつたり止むと、こそくと掛菜をむしる音がする。が、老人の耳にそんな音の聴取れようはずがない。婆さんは俯いたまま、また糸を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよいくと小刻みに籬を傳つて、隣から隣へと狭苦しい物蔭を出たりはいつたりして移つて行くのだ。それが鶯である。

鶯と後先になつて頬白が来る。冷たい雨のびしよくと降る中を獨者の頬白が灰色の胸までぐしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の啼聲を解いて、

本多重次作

一筆啓上つかまつる。

子供泣かすな、火の用心。

今度は便に金十兩

やりたいけれど、一文も御座なく候。

と言傳へてゐるのを思ひ出して、しみくと世渡のむづかしさと、旅心の寂しさを思はずにはゐられない。

後ろの雑木林にこんな小鳥が来る頃になると、野にはもう

鳴り鶴

そろ／＼鶉が來鶉が來る。(畿内行脚)

北原白秋

名は隆吉

詩人

歌人

明治十八年福岡

縣柳河町生

九 雀の生活

北原白秋

かういふ雀がゐました。一羽でした。それが熟しきつた陸稻の穂に、その横から飛びつきました。さうして其の儘前向きにその穂先に縋りつくと、重みでその穂が次第に撓んで來ます。そこでその穂と一緒にじんわりと雀が下つて來ます。するといよいよその穂が垂れて、尻尾が地に着きさうになると、つつと離して、自分はまた羽ばたきして、宙で大喜びです。また穂先に縋りついて下つて來ると、また前のやうにつつ

と離す。これをたゞ獨りて、いつまでも／＼やつてゐるのでした。

まるで子供です。

これも前のと似てゐます。

雀が一羽孟宗のほずゑに止つてゐました。雀はほずゑの笹葉と一緒に揺れてゐました。風があつたのです。見てゐると、孟宗竹が上半身から全部に大きく緩やかに揺れてゐたが、風が強くと出たらしく、その竹が雀のゐる上から、次第に斜に傾いて來る。それでも雀は飛離れずに、辛抱のしきれるだけしがみついてじつとしてゐる。その内に愈、身體が枝と垂直にぶら下つて了つて、もうどうにもならなくな

ると、やつと枝を離して、宙で羽ばたきしながら、ちゅつちゅつ、ちゅくくです。
可なり辛抱強い遊びです、これなどは。



筆月桂林松)雀に竹

葛飾の家
東京府南葛飾郡
小岩村の寓居

ところで、をかしくてかはいゝのは、葛飾の家の古池に水浴びをしてゐた雀でした。

それは鴉の行水するのを見てゐて、ついたまらなくなつた

のです。鴉がちやぶくと綺麗な水玉を跳ね散すと、雀も二三羽、向ふの稗草のかげでばちやくです。暑い日で、夏の静かな光を頭からかぶつて、をかしさうにちよつと水に翼をつけてばちやくです。まるで子供が水鉄砲でも弾くやうに、眩しさに頭を振りくでした。

冬になつて、その古池に厚い氷が張りつめた。或朝、何氣なく見てゐると、雀が一羽、羽ばたきそこねて氷の上に落ちると、そのまゝするくと亡くなりました。これは面白いといふので、また翼をひろげて、小さな二つの脚で小意氣に身を反らすと、するくくくです。と、よろけさうになつて、慌てゝ、縁の枯つ葉の眞菰に縋りついて了ひました。ちゅつ

ちゆ。

するとまた外のが、それを見てちゆつちゆ、頭を前にうつぶけたなり、するりとやると、這つて轉んで了ひました。

今度はまた三番目のがするくくとやると、三足目でするりとなつて、尻餅をついて了ひました。ちゆつくとちゆ。

それから三羽の雀はもう嬉しくてたまりません。代り番ここに夢中になつて、するくくく。

そのかはいかつた事といつたらありません。

かういふ雀が集つたら、何か事あれかして、ちゆつちゆ騒いでゐます。

時とすると、大勢が廂に出、一羽が電線の上で綱わたりで

もやらかすと、もう大喜びで、やんやんくです。

雀はまつたく面白がりやの、お調子乗りの、ふざけずきで、喜び出したら無性にうれしがつて、もう一切合切無我夢中です。
(雀の生活)

一〇 母と蘆

西條八十

ふるさとの母をおもへば、

片岡の蘆もなつかし。

さやくと風のわたれば、

靡きよる夕べの穂波、

西條八十
詩人
明治二十五年東
京生

わが母の眉をしのばせ、
しめやかに雨ふる夜半は
そことなき葉ずれのひゞき、
わが母の聲音にまがふ。

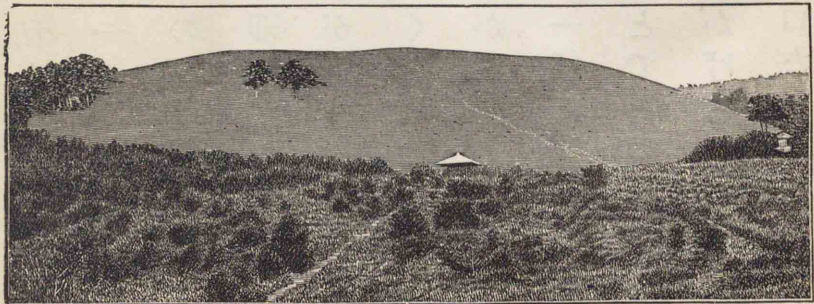
ふる里の母をおもへば、
片岡の蘆もなつかし。

少年時代私は東京を離れて一年ばかり奈良の古都に近い田舎で暮したことがある。生れて始めて両親の傍を離れたので、私は明けても暮れても、東京の空を眺めては、あの明るい銀座の街の灯をこひしがった。

コバルト
Cobalt

私が居た家の裏手は小高い丘になつて、そこには青い蘆が一面に生え茂つてゐた。私の室の窓の障子を明けると、眼前にそれが見えた。晝間は丘の上にコバルト色の空が覗いてゐる。をりくく白い雲が流れた。蘆の中では葦切が玉を切るやうな聲を立てた。夕暮には、何處からともなく次第に黝く煙のやうにせまる暮色のうちを、冷たい夕風がさやくくわたつて来て、蘆の細い葉をゆるがした。私が一ばん好きなのは、この夕風にそよぐ蘆の葉を見てゐるところであつた。あちらに黒く、こちらに白く、風に靡いて光りかける蘆の穂波を見てゐると、それがいろくくに人の眉鼻口などを描くやうであつた。殊にそれが優しい顔付に見

嫩草山
奈良市の東方春
日山の北にある
丘陵



えるので、私は懐かしい母の顔を思ひだした。私はじつと眼をつぶつて其の蘆の生えた丘の面いつばいの巨きな白い母の顔を想ひ浮べた。さうして、うすら冷たい風のなかで、ひとり「お母さん」と、な草つかしく、涙ぐましく叫ぶのであつた。

又、その時分、私は毎晩一里の路を歩いて、奈良の町まで英語を習ひに行つた。嫩草山の麓にギンポールといふアメリカ人のお婆さんが住んでゐた。もう七十に近い年で、年中真黒い服を着て、赤くた

だれた兎のやうな眼に大きな眼鏡をかけてゐた。その人に夕方の六時から七時まで英語の讀方と發音とを教はり、それから温いおいしい紅茶を御馳走されて歸つて來る時分には、もう田圃のなかの夜路にはとつぷり日が暮れてゐて、蛙の聲だけが諸方に淋しく聞えるのであつた。

かうして獨り丘の徑を下つてくるときに、兩がはの蘆の葉のさらくと戦ぐ音は、恰も彼等が内證で何か囁き合つてゐるやうであつた。時としては、多數の人が其の葉蔭に集つて何かひそひそ話してゐるのではないかと思はれることがあつた。さうして其の聲の中に、殊更聞き覚えのある母の聲が聴きとれるやうに思へた。

しめやかに小雨の降つてゐる夜などには、とりわけさうした感じが深かつた。室へ戻つて戸を締めて床に就いてからも、やさしく諄々と諭すやうな母の聲音が、いつまでも、しみじみと耳もとに響いてゐるのであつた。

その頃の母戀ひしさの心を、私は「母と蘆」といふ名でこゝに歌つたのである。（海邊の墓）

二 保津川下り

徳富健次郎

午後二時近く龜岡で下車。いよゝ保津川を下るべく、すぐ車で保津の乗船場に赴く。幸にも夜來の雨は止んで、時雨を含んだ雲の間から折々薄日を漏らして居る。やがて

保津川
桂川の上流
丹波國南桑田郡
龜岡町から山城
國葛野郡嵯峨町
に出る山谷三里
の間の急流

川端の乗船場に来た。水面半町餘、さゝ濁つた保津川が瀬の音を立てつゝ、さつくと奔つて居る。それを前に、小さな家が二三軒、皂莢樹の老木が二本、乾からびた葉を寒い川風に鳴らして居る。下手に橋がかゝつて、向ふには山に倚つて高低した村がある。保津村であらう。丹波の山國もこのあたりは打開けて、美しく色づいた山々が長閑に眼界を造つてゐる。乗船切符賣場で切符を買ひ、舟の支度の整ふ間、茶店に憩ふ。丹波名物の桑酒、酒は飲まぬが、瓢形の容器の面白さに一つ手頃なのを買ひ、舟中の料に大きな柿など買ふ。

用意が出来たとの知らせに、一同橋の下手に下りて川舟に

乗込む。兩舷の高い薄板の舟である。皆は薄縁の上に敷いた赤毛布に坐り、余は椅子に腰をかけた。船頭は前後に各一人、中程に一人、皆頰冠して草鞋ばき、前後は棹と櫂で舵をとり、中のは櫂で漕ぐのである。

橋杭に繋がれた纜が解かるゝを待ちかねて、舟はするゝと流れ出した。夜來の雨に水が増して、流はなかくゝ急である。乗船場の茶屋も保津村も見ると、あとじさつて行く。忽ちくの字に川は大曲りする。勢に乗つて下つた舟は突きかける様にして、ばたりと東の崖下に止つた。深さうな水が小さな渦や色々の波文を縮らして居る。地藏淵といふさうな。と見ると、人家の巢くふ高い崖の上から、電

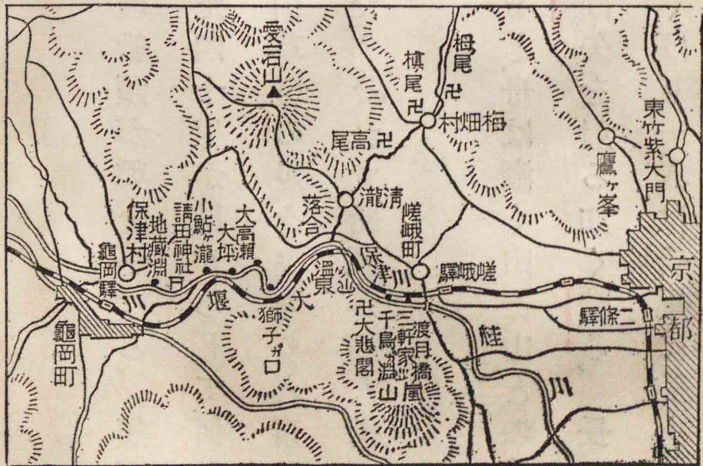
光形の嶮しい坂を、頰冠して腰蓑を着け、櫂を肩に、辨當箱ぶら下げた男が下りて来る。

「忠兵衛さん」と舟の中から前舵の船頭が聲をかける。頰冠の中から薄ら髭のにこゝした四十男が見おろして、何かいふ。忠兵衛さんはやがて股引草鞋の足をひらりと舟に乗込んで、中程の座に櫂を立てた。それで船頭が四人揃つたのである。

南丹波の打開けた谷が後じさると、舟は漸く山と山との峽に入つた。流が急になる。舟は矢を射る如く駛る。長い棹を取つた一人は船首に眼をくばり、一人は船尾に舵をと

り、忠兵衛さん外一名は中間に兩舷に分れて始終櫂で漕ぐ。

併し漕ぐ要はない程舟脚は疾い。夜來の雨は保津川を膨らして好奇の客に期待以上の壯快を味はせるのであつた。東の崖上にある請田神社の祠を彼よくと指さし過ぎて、小鮎が瀧大坪大高瀬獅子が口と段々面白くなつて行く。峽は愈狭くなつて、水は焦ちに焦ち出した。大きな岩を衝き、小さな岩を跳り越え、白泡立てて勢猛に跑けていく。其の水にさも無邪氣にふわりと舟



保津川附近地圖



保津川下り

は乗つて、つるくするくと無造作に飛んで行く、面白さうに飛んで行く。椅子にかけ見て居ると、緩勾配の瀑布のべつに連ねたやうな水の坂が行手に見える。ぶつかつたら舟を微塵に碎くにきまつて居るやうな岩が、真中にのさばり返つて居る。水と水とこぐらかつて、泡を噛んで眞白にたぎり立つて居る處がある。ひやりとする。何處をどうして通つて行くかと心配する。

船頭騒がず、舟は何處までも無邪氣に、つと其の勢に乗つて、ささ、さつと逆落しに迂りおりる。滑らかなものだ。少しのあぶなげもない。そんな平凡な處だつたかとふりかへつて見ると、今過ぎた瀬は後に白い階段を押立て、居る。よくもあんな處を無事に下つて來たものだと思ふ。

兩岸の山々は程よく色づき、杉や松の翠と美しい色の配合を見せて、舟を迎へては送るのである。忽ち峽の内が小暗くなつた。ざあと時雨が降つて來た。傘翳す暇もないので、赤毛布を打ちかぶつた。色づく山から斜に落來る筋を見せて、さと川瀬を撲つ時雨の面白さ。「降れ、もつと降れ」と囃す間に、搔消す如く時雨は過ぎた。舟はもう三里も下つ

球磨川

肥後國五家庄の
山中に發し八代
海に入る
日本三急流の一

清瀧川

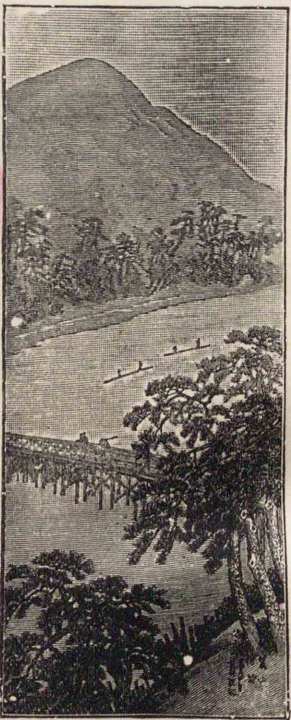
京都府葛野郡棧
敷岳に發し愛宕
山の東麓をめぐ
つて大堰川に入
る

て、丹波から山城に入つて走つて居るのである。

柔かな京の附近にこんな壯快が潜んで居るのは不思議といつてよい。肥後の球磨川に果さなかつた川下りの遺憾は、こゝで償はれた。一行は段々危険に馴れて、何でもかでも、瀬、瀬、瀬でなければ面白くなかつた。少し水勢がのんびりして忠兵衛さんの櫂の漕ぎばえがする様を處へ來ると、いひ合した様にあくびが出る。ごろくくといふ響に頭を上げると、西の崖の上高く汽車が走つて居る。追瀬が稀に、流が緩くなつた。もう嵐山も遠くあるまいと思ふと、舟路の短いのが惜しくてならぬ。やがて清瀧川の落合に來た。細い川が東から落ちて來る。

高尾梅尾榎尾
共に葛野郡梅畑
村にある山
合せて三尾山と
いふ
紅葉の勝地

大悲閣
嵐山の西北方山
腹にある寺
本尊は千手觀音
三軒家
天龍寺の西渡月
橋の上流
旗亭などある處
渡月橋
嵯峨から嵐山に
通ずる橋



(畫石琴森) 橋月渡

兩崖から差出た支柱で支へた木橋が架つて居る。小さな路が山を上つて居る。「此處でよく寫眞を撮らはりまつせ」と船頭の一人がいふ。余も寫眞師の眞似をする。此の川は高尾梅尾榎尾の紅葉を浮べ、清瀧の里を過ぎて流れて來る。此處を東北に溯ると、清瀧に出るのだ。鐵橋を潜つて大悲閣の下を過ぎ、千鳥が淵を通つて嵐山三軒家の下に舟は着いた。今夜は泊つて、明朝舟を曳いて保津へ歸るといふ船頭たちを犒つて舟から上る。渡月橋に近い茶屋に腰かけて、

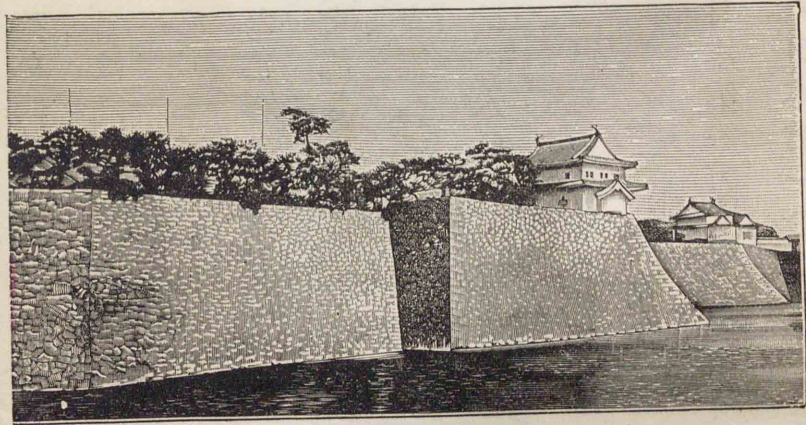
茶を飲み餅を喫しつゝ、嵐山を眺める。日は既に入つたが、黄昏近い薄明に、もう五六分染めた嵐山の明るさが、空にも水にも映つて居る。柔かな線落ちついた色彩のどうしても畫である山の美しさよ。其の明るさを流しもあへず、永久に傍うて流るゝもとの保津川、今は名を變へて大堰川、またの名桂川の美しさよ。此の水、此の山、京ならでは所詮得られぬ。(死の蔭に)

二 大阪城

澁川玄耳

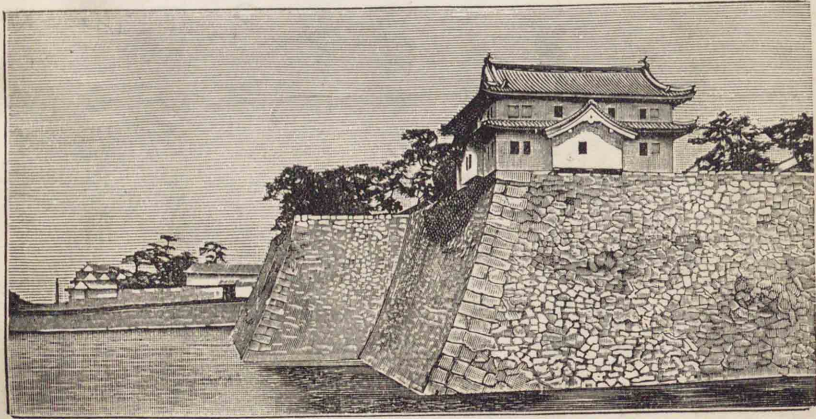
日本第一の出世をした、日本第一の寛濶な殿下様が築かれた日本第一の堅城は此處大阪城。それが日本第一に早く

澁川玄耳
名は柳次郎
藪野椋十とも號す
陸軍省法務官
新聞記者
文學者
長崎縣の人
大正十五年歿
年五十五



大阪

亡びた幕府ぢやから頗る妙。
 梅の、桃の、牡丹の、藤の、百日紅の、
 木槿ぎげの、山茶花の花のいろく
 に比べて、豊臣家は櫻の様ぢや。
 ばつと咲誇つて、けろりと一夜
 の嵐に散り果てた。源平・北條
 足利・新田・織田・徳川は、本家なり
 分家なりそれゆかりが残
 つてゐて、公侯伯子男爵の華族
 として、今の世にも血統を留め
 てゐるけれども、豊臣家ばかり



城

は、榮も、辱も、軍書の外に何ひとつ
 つ残らない、それはさつぱりし
 たものぢや。
 第四師團の正門に差掛る爪先
 上り、番兵が立つてゐる。誰何
 する。名刺を出す。某部の某
 將校に面會と斷る。門を潜つ
 て右手に番兵の頭が居る處に
 行けと教へられる。其處で又
 名刺を出して用向を申し述べ
 る。番頭ばんがしらが帳面を繰展げて、何

か認めて、兵を一人案内に出してくれた。
第二の門を潜る。電光形に幾度も曲つて行く。案内の兵はさつさと先に立つて行く。短い劍がべたくと腰を打つ。

「もしく」と呼べば、兵は立停る。

「何でありますか」と切口上が、當世の武者言葉と見える。

「眞田幸村の固めた處は何處でございませう。」

「分りません。」

「向ふの石垣に穴が有るのは何でございます。」

「あれは銃眼であります。銃を託して射撃する處であります。」

眞田幸村
通稱左衛門佐
大阪方の勇將
元和元年(三七五)
戦死
年四十六

「さやうでありますか。彼處から撃てば、何處までとゞき
ますか。」

「小銃でも二千米は有効な射撃が出来ます。速射砲であ
りますと、八千米は確實な照準が出来ます。」

第三の門を潜れば廣場が有つて、大きな役所がある。兵は
わしらを玄關外に待たせて、一人中に這入つて了つた。

見廻せば樹木もある、芝生もある。度々の戦争に焼けたの
か、大木といふ程のものは無い。石は評判通りに大きい。

一つで五間も十間もあらう。仰山なものぢや。此の石一
つ運ぶに、とても千人や千五百人の力では運べるもので無
い。よし何千人掛つても、一日に五町とは動くまいに、此の

大きな城を築き上げる夥しい石をようも寄せ集めたもの、
殿下の威光といふは偉いものぢや。若しも、わしらの村で
此の石一箇を百里も遠方から運ばせられたならば、三百戸
足らずの瘠村では、男總出で以て二三代はかゝるに違ひな
い。想へば恐しいことぢや。(日本見物)

一三 眞田幸村父子

大阪夏の役、天王寺口の戦に、眞田幸昌敵と組討して取りた
る首を鞍の四方手に付け、負うたる傷より流るゝ血しほ拭
ひもあへず馳歸る。毛利豊前守勝永、榎島玄蕃允昭光、幸昌
が傍に立寄り、扇を開きて打扇ぎつゝ、偕もくゝと大いに感

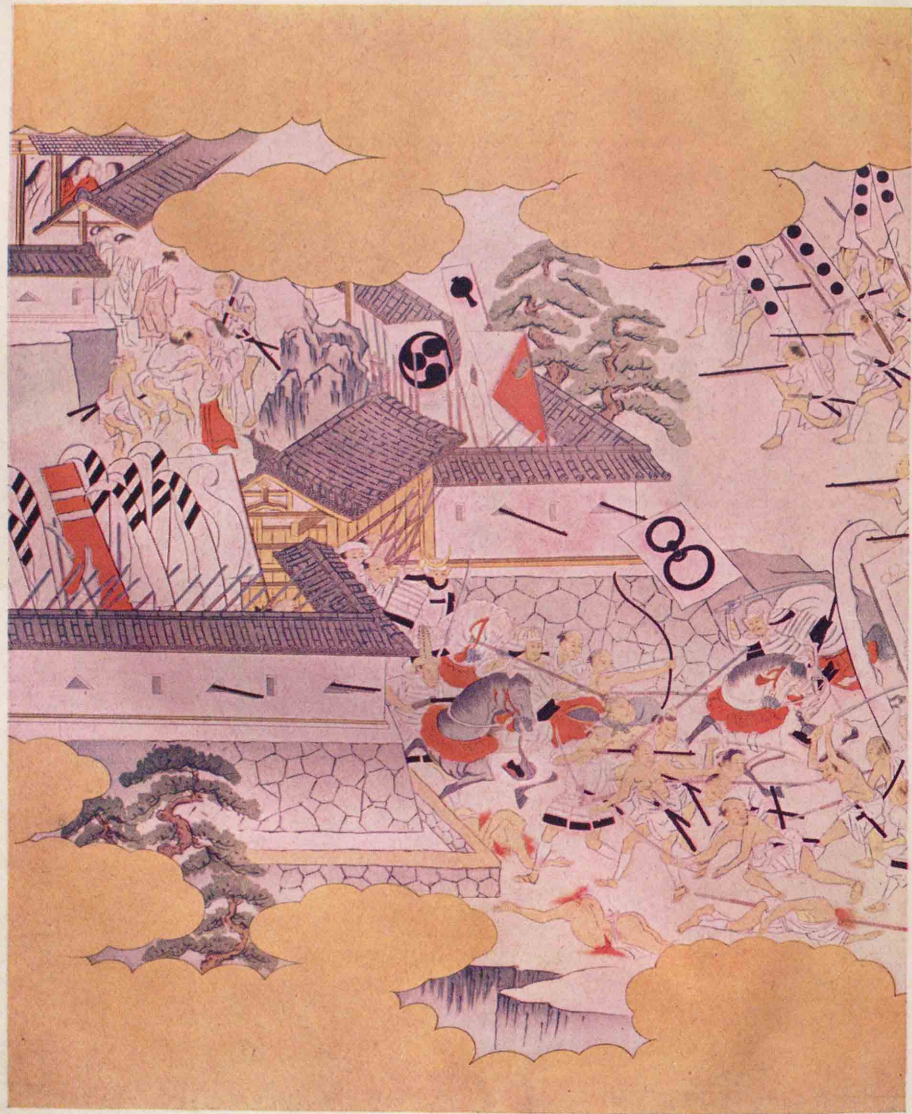
天王寺口の戦
元和元年(一七二五)
五月六日
眞田幸昌
通稱大助
幸村の長子
元和元年(一七二五)
戦死
年十六

じけるに、父幸村も喜悅の笑を湛へて、手は淺きか。と尋ねけ
れば、幸昌は、薄手にて候。と答へたり。

明くる七日、和議の將に成らんとするを聞き、幸村、陣より幸
昌を城内に返さんとて、近く之を呼び、汝、左衛門が子たる故
を以て、諸將と肩を比べて采配を取ること、身の面目に非ず
や。父は今日討死と思ひ定めたれば、今生の名残に、父をよ
く見覺えて、更に悲しみ歎くことあるべからず。此の軍愈、
味方敗北して、秀頼公御自害あらば、其方も直ちに腹搔切つ
て、死出の御供申すべし。命助らんとて、必ず降人などに出
で、父が名を汚すべからず。若し又秀頼公此の度の死を遁
れ給はば、假令何れも自害に及ぶとも、其方は命を全くして、

伊豆守
真田信幸
幸村の兄
萬治元年(三〇)
卒
年九十三

下人一人にても生残りたる者あらば扶持し召連れて、秀頼公を守護し申すべし。くれぐれも父が武勇の名を汚すことあるべからず。是、子たる者の孝行の第一。親の志を繼ぐこそ忠義なれ。早々城内へ罷り歸れ」とぞ言ひける。幸昌父が詞を聞く中より、落涙袖を絞りけるが、やうくに歎きを止め、情なき仰かな。討死と思召し定め給ひなば、大助にも共に討死仕れとこそあるべきに、如何でさは宣ふぞや。秀頼公を見立て申す事忠義に候はゞ、父上其の任に當り給ひてこそ、かひはあるべけれ。然るに父上は討死ありて、弱年の某に罷り歸れとの儀、心得難く候。關東勢の中には、伯父伊豆守殿を始め、一族の人々もおはし候へば、父が討



大坂夏の役

死に悴の大助は、何とて一緒にあらざるぞや。父を棄て、
腑甲斐なくも陣屋より城内へ遁れ歸りしか。など嘲り給は



村幸田眞
(典辭史歴本日)

ん。他人はさておき、一族親
戚への面目甚だ以て立ち難
し。秀頼公を御見立て申さ
んは、御譜第の人々多ければ、
大助が罷り歸るにも及び候
はず。又去年母上に別れ奉
りし後、御文の便に『生きながらへて相見んは願はしけれど
も、萬一の際には必ず父上と同じ枕に討死せよ。かりそめ
の名こそ惜しけれ。』と誠め給ひしこともあれば、くれぐれも

御免下さるべし。御一緒に今日の軍に罷り立ち、せめて雑兵の二三騎も討取り、其の後、腹搔切つて黄泉の御供仕らん。と言切つて、歸るべき氣色は見えざりけり。

幸村も心強くは言ひけれども、今は落涙に及びつゝ、いしくも言ひける嬉しさよ。さりながら父と一緒に討死するのと忠義の道に叶はず。長く命を全くせよといふには非ず。今日は命ながらへて、明日にてもあれ、秀頼公御自害の砌、潔く腹搔切つて、泉下に再會を期すべし。今日の御和睦御相談の事、其の實否知れ難し。さればとて、其の成行を見定めんとて、左衛門程の者が出陣の馬を無下に城へは返されじ。又、戦を猶豫し形勢を窺ふ様子見えなば、必定味方の士氣も

衰へぬべし。さるによりて我はこれより引返すことなり難し。あはれ、世の人の願ふ命二つ持てるこそ今の我が身の幸なれ。二つの命を君に捧げて、一つは今日討死して武名を揚げ、今一つは城内へ歸つて、今日明日の體を見届けんとは思ふなり。汝が命はくれぐれも汝が命にあらず、父が命なれば、父が心に任せ、早々罷り歸りて秀頼公の先途を見届け奉るべし。と、詞を盡して教訓しけり。

幸昌やうくに聞入れて、然らば御暇申して城内に罷り歸り申すべし。愈、今日討死と思召し定められしや。と、又父が顔を守り見て涙に打沈む。幸村詞を荒らげ、親子の名残何時まで惜みたればとて、盡くる期あるべしや。左衛門が子

の大助、父と引分れて城中に歸り、秀頼公の御生害の際まで附従ひたり。といはれんこと、後代までの譽、餘人の及ぶべきにあらず。早々罷り立てよと云ふ。幸昌、成程仰にてこそ候へ。父上の御名を預りし此の身世に大切に候へば、寄手の追付かぬ内に御暇申さんと、心強く思ひ切つて父が前をば立出で、馬に乗るべき體に見えけるが、猶も父が方を見遣りて佇むを、幸村近習の者を以て、急ぎ罷り越すべき由催促しければ、せんかたなくも乗出し、幾度ともなく父が方を見返りつゝ、やうく坂を下りて城内に歸りたり。幸村は幸昌を見送り、落つる涙を押へ、昨日譽田にて痛手負ひしが、弱る體の見えざれば、よも最期には人に笑はれじ。心安しと

譽田
河内國南河内郡
古市村大字譽田

言ひけりとぞ。譽田、名將言行録に據る

一四 八道の山

大町桂月

大町桂月
名は芳衛
國文學者
高知縣生
大正十四年歿
年五十七

八道の山よ、いざさらば。
年の七年戈執りて
踏荒したる日の本の
益荒雄は今歸るなり。
釜山の浦の秋ふけて
空もしぐるゝ夕間暮
波路遙かに帆を揚げて
汝と今や別るなり。

知遇の恩に身を捨て、
 四百餘州をわが駒の
 蹄に蹴んと勇みしも、
 覺めてはかなき夢なれや。
 我を知りにし太閤の
 世になき後は、誰が爲に
 千里の外に戈執りて、
 異境の山にいくさせん。
 恥をしのびて故郷に
 歸るも、後に死なんため。
 主君の家の行末を

石田
 石田三成
 小西
 小西行長

思へば重き命なり。
 あはれ太閤世を去りて、
 よつぎの主は幼し。
 石田・小西の小人ばら
 かならず事を誤らん。
 わが幼時よりはぐくまれ、
 恵にあみし豊臣の
 家を護りて死なん身の、
 永くは住まじ、世の中に。
 跡に見捨つる益荒雄の
 亡き魂若しも知るあらば、

三途の川や六道の

辻にしばらく我を待て。

是を限の見をさめに

今一度と見返れば、

波音すごく雨荒れて、

野山は霧に朧なり。

八道の山よ、いざさらば。

國の譽とたゝかひて

花と散りにし日の本の

男子の骨を護れよや。(黄菊白菊)

坪内逍遙

名は雄藏

英文學者

劇作家

文學博士

早稻田大學名譽

教授

安政六年(五二九)

美濃國生

天城山

伊豆國の中央に

峙つ山

葦山

静岡縣田方郡菫

山町

江川英龍

號は坦庵

幕府洋式教練の

教長

安政二年(五二五)

歿

年五十五

一五山 狩

(戯曲)

坪内逍遙

先づ太鼓の音が聞える。續いて喇叭の聲。廻れ右、一二、々々などといふのが段々に近く聞える。處は天城山の一部。

葦山の代官江川太郎左衛門英龍が、兵式教練を兼ねて、所謂農兵を引率して山狩に出たところである。銃は舊式の劍附き鐵砲。太郎左衛門は年齡五十餘歳、打裂羽織、裁袴、極質素な服装、葦山笠を戴き、麓までは騎馬で來たらしく、鞭を持ち、下官でもあり門弟でもある。二壯士、澤野某、湯ヶ島某を従へ、農兵共に號令しつゝ登つて來る。登り了ると、とまれと號令する。つゝいて、休め、の號令につれて、農兵等は肩にしてゐる銃をふるし、それによろしく寛ぐ。太郎左衛門よき處に床几を立てさせて腰をふるす。澤野と湯ヶ島は其の左右に踞る。此の途端、下手より太郎左衛門の家の若黨甲登り來り、太郎左衛門の前へ跪いて、

甲 はつ、申し上げます。

佐久間修理

名は啓
號は象山
信濃松代の藩士
幕末の志士
元治元年(五三)
京都で攘夷黨に
暗殺された
年五十四

江川 何だ。何事か出来いたしたか。

甲 只今、松代藩の佐久間修理と申さるゝ御仁が御休息所へ参られました。御面會が願ひたいと申されます。

江川 なに、佐久間修理が。

して、汝は何と申した。

甲 只今山上にて御狩獵

と申しましたら、それ

は存じの上で参つた。

われらは先年暫時御

門下に列し居つたる者、此の度公務を帯び、相豆沿岸の檢分に罷り越したる所、此の山にてお獵と承り、幸の折



門衛左郎太川江

筆蹟

余年二十以後、
乃知匹夫有レ繫三
一國。三十以後、
乃知有レ繫天下
、四十以後、乃
知有レ繫五世界。
象山平啓書

江川 折角の事だ、苦しうない。こちらへ案内しろ。

柄とお見舞申した。と申されます。いかゞ計らひませうや。

甲 はつ。(と行かうとする)

余年二十以後、
乃知匹夫有レ繫三
一國。三十以後、
乃知有レ繫天下
、四十以後、乃
知有レ繫五世界。
象山平啓書



湯ヶ島

先生失禮ではござ
います。佐久間氏
に御對面はいかゞ
でございませうか。
あの仁は、先年失禮

にも先生の御教授振を評して、「肝腎の砲術を第二にし
て、只山獵々々と毎日のやうに山や野を駈廻るのは、飛

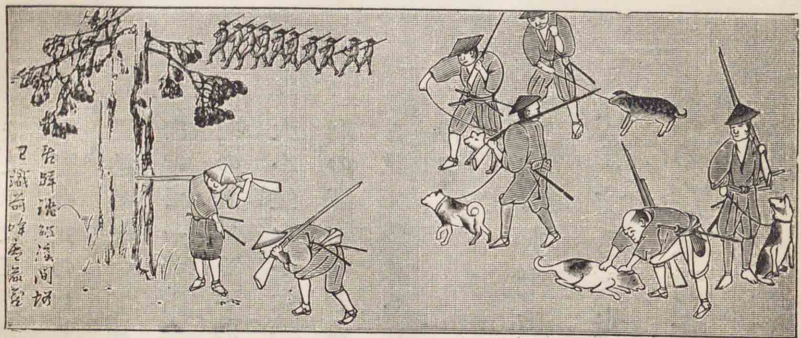
下曾根殿
名は金五郎
幕臣

品川沖
東京府荏原郡品
川町の海上

脚の修行にしか相成らん」と誹謗致した上、下曾根殿へ間もなく入門仕つた表裏者ではございませんか。

澤野 そればかりではございません。噂に依りますれば、彼の仁、例の昨今品川沖にお築きたて中のお臺場を、偏に先生の御獻議の如くに申しなし、あのやうな兒戯にひとしいものが、いざとなつて何のお役に立たうぞ」と、しきつて誹謗いたしまするやに承り及びました。今日の推參も、或は何か悪口の種を探しに參つたのかも圖られませんか。手前も御對面は御無用かと存じます。

江川 いや、さうではない。あの仁は當今稀有の傑物だ。それだけにまた、高く自ら持して、苟も人に下らぬとい



江川太郎左衛門兵式調練圖

ふ倨傲の癖もあるのだ。他流試合が修行の第一であるやうに、異つた考を持つてゐる者にぶつつかるのが、何事に附けても有益だ。こちらへ案内しろ。

これにて甲はもと來た方へ去る。

佐久間はどちらかといふと學者肌で、理には至つて精しいが、實技には長じない方だ。が、併し、傑物には相違ない。……さ、もう一巡調練をしようぞ。……
〔と農兵らに向つて「氣を付け」〕

とこれにて、門弟はじめ農兵一同姿勢を正す。是より「擔へ銃云々」の號令式の如くあつて、「進め」廻れ右「停れ」等いろ／＼あつて、とゞ弾込めを命じ、規（きま）を附けさせ、撃ての號令とともに、或一方の凹所へ向けて一齊射撃をさせることよろしくある。

此の途端、下手回所より佐久間修理、總髮鬚齡四十位、打裂羽織野袴、大小笠を手に持ち、一人の僕に新式の元込め銃を擔がせて従へ、先刻の江川の若黨に案内せられて登つて來る。太郎左衛門はかくと見て、農兵らに「休め」の號令を下しおきて、佐久間等の近づくのを待つ。

佐久 存外にも御疎濶（そくわく）に打過ぎましたる段、平に御容赦（じやうじやう）を願ひまする。先づ以て御健勝の體、祝着に存じまする。此の度公務を帶び當地方へ参りましたる所、恰も御山狩と承り、よい折柄と存じ、失禮を顧みず推参いたしま

した。

江川 や、これは／＼お珍しい。先づ御貴殿にも御無事で大慶に存じます。え、どうやら此の豆相沿海の防備を御視察とやら承つたが、さやうでござるかな。

佐久 はい、いかにも。先づ浦賀下田を第一といたして。

江川 それは御苦勞な儀で。

此の時、佐久間は、澤野湯ヶ島とも舊面識であるらしく、互に會釋（かいしやく）することある。

佐久 さて、御山狩中、お妨げとは存じましたなれど、少々御覽に供したい物がござつて。

と、僕を顧みて、携へて來た元込め銃を受取り、

え、此の品は拙藩の鐵砲鍛冶片井京助と申す者が、多年苦心の末、本年に至り、やうやく成功に及びましたる新工夫の鐵砲でござる。實は此の器の製作には手前も少なからず心力を勞しましたことゆゑ、かたゞ高覽に供し、御鑑定をわづらはす次第でござる。

と、銃を江川に見せる。江川受取つて、

江川 ほうう、いかさま。これは曾て見ませぬ珍しい製作して效用は。

と佐久間へ返す。佐久間受取つて、

佐久 御覽下され。これは西洋傳來の尋常の鐵砲とは違ひ、彈を込めまするに、一々銃を逆さにいたして込めるや

うな迂遠なることはしませいで、すぐにかくの如くと取扱つて見せて、元込めにいたすのでござる。それゆゑ名附けて、元込め銃と申し、在來のよりは二三倍も早く彈込めが出来ますから、實戦上の利益は莫大でござる。若しお氣に召さば獻じたく存じ、持參いたしました。

江川 成程。これは巧みな製作で便利千萬。御工夫の程、敬服いたしました。

佐久 時に、先生には如何おぼしめさるゝ。外夷どもの跳梁年々次第に甚だしく、就中イギリス夷はともすると専ら此の豆相沿岸に乘込み來らんとする氣配がござる。然るに此の時に當り、邊防の爲に備へ附けられたる大

砲は、僅かに一百門、夷船二艘に當るにも足らぬ上に、毎砲の彈丸は僅かに十個。中には砲ばかりで彈の準備の無いのもあると承る。これほど心もとない事はござらん。手前慨歎の餘り、昨年例のペウセル兵書にもとづき、大砲六門を鑄造せしめ、藩府松代の平野に於て試發をいたし、相當の成績を挙げましてござるが、おそらく本邦にて洋風の大砲を鑄造仕つたのは、これが始めてであらうかと存じます。なれども、外夷どもにして、萬一にも上陸に及ば、とかく小銃の戦とも相成りませう。が、其の小銃とても、在來のは迂遠至極の物とても實戰の役には立ちません。そこで此の數年來

肝膽を碎き、やうやくかやうな品を工夫し得たのでござるが……

と昂然として、いかにも自慢さうに語りつゞける。湯ヶ島こちらへかねた體で、

湯ヶ島 あゝ、いや、佐久間どの、しばらく。では、在來の鐵砲はすべて迂遠至極の物で、とても役には立たんと仰せられまするか。

佐久 いかにも。いざとならば殆ど無用の長物でござりませう。

湯ヶ島 なに、無用の長物。では江川先生の多年の御教練をも同じく無用の長物と仰せられまするか。

佐久 いや、御教練を無用だとは申さないが、武器はやがてお改めにならねば叶ひますまい。御教練の方式とても、武器が改れば自然とお改めなさらねばならぬことよもござりませうて。

湯ヶ島 では、先年御批判あつた如く、先生の此の方式は、飛脚の修行も同然だと仰せられるのでござるか。

と氣色ばんで詰寄るを、太郎左衛門制して、

江川 あゝ、これ、何事でござる。成程。先づ武器を完全に致すことは當今の急務でもござらう。が、いざ實戦となると、何よりも大切なのは、めいゝの氣魄、膽力、次は實技の熟練でござる。突然に事が生じた場合、魂が顛倒

するやうでは、いかなる利器も用をなしません。そこで變に處してあわてぬ稽古が必要でござる。同じく稽古と申しても、死物の的を掛けておいて、よく覗つてから撃つばかりの稽古では、いざといふ時の役には立ちません。だから拙者は、かやうに毎々山狩をさせます。どんな猛獸がいつ不意にどこから飛出してまゐらうと、立ちどころに撃止める稽古をさせるのでござる。此の變に處する覺悟、といふよりも練習が積んでをらんと、利器も存外無用の長物となります。て。
佐久 全く先生のお説の如く、とかく世の中の事は理窟ばかりでは通りません。利器か鈍器かは實際を見届けて

から定まることとございませう。

湯ヶ島 さやうく。それには幸の此の山狩。佐久間殿の手練の程を、其の御自慢の元込めの銃とやらで拜見いたしたいものでござる。

と嘲弄するやうにいふ。

要末

佐久 (むつとした體で) 折角のお需めだが、手前苦心の此の鐵砲は、御國に仇をなす洋夷どもを膺懲するのための大切の兵器でござるから、かりそめの遊戯などに使用することは堅くお斷り申す。

湯ヶ島 何と仰せらるゝ。然らば江川先生の多年の此の御教練を遊戯だと仰せらるゝのでござるか。

江川 (制して) あゝ、これ、またしても、佐久間どのに對し失禮でござるぞ。いや、自分は佐久間どのにいろく折入つて御談合申したい事があるから、お手前は其の間自分に代り、農兵どもを引きつれ、西谷の方で、もう一練習試みて下さい。兎ぐらゐは獲られませうぞ。

湯ヶ島 かしこまりました。

と、よろしく佐久間にも會釋することあつて、農兵らをひきゐ、一方の四所へありて行く。あとには江川と澤野と佐久間主従だけ殘る。

澤野は銃を携へてゐる。

江川 先刻ペウセルの兵書によつて大砲數門新に御鑄造になつたとのお話であつたが、それは例の加農砲でござ

カノン
Cannon
口径十五吋
以上五十吋
までの大砲

Mortar
白砲
モルチール

Howitzer
榴弾砲
ホウイツツル

るか。

佐久 いや。加農はたゞ一門だけ、別にモルチールを三門、ホ
ウイツツルを二門鑄させました。さうして加農を地
砲、モルチールを天砲、ホウイツツルを人砲と名づけ、以
後は此の譯名によつて天下に流布させる心得でござ
る。

江川 砲身にはやはり青銅をお用ひでござらうな。

佐久 さやうでござる。但し手前は、銅百分に錫十一分半加
へました。

江川 いや、それは在來のに比して大分の進境でござるが、し
かし、かなたが例の鋼鐵の大砲を以て攻寄するとすれ

ば、こなたも同じ利器を以てこれに當らねば、勝利は覺
束ない事でごさる。實は自分は此の數年來専ら此の
儀に潜心いたし罷り在るので。

佐久 手前とても、それに心附かんでござらんが、鋼鐵を鎔
かす法は、洋夷が祕中の祕、これを知る道はござらん。

江川 いや、必ずしも無いとは申されん。實は手前、小規模に
は既に屢、成功もいたしてござるが、いまだ……

といひかける途端、遠くにて一齊射撃の音が聞える。と同時に關
の聲が聞える。と澤野は一方の凹所を見やつて、

澤野 おゝ、先生、あそこへ兎が數疋飛出して參りました。

江川 なるほど。その銃をこれへ。

澤野 はつ。

と銃を江川へ渡す。江川それを取つて、

江川 御免。御貴殿もいかゞ。

といひながら、覗ひもあへず一發はなす。佐久間は冷然として見てゐる。

澤野 あゝ、中りました。

といふうち、以前の湯ヶ島、大兎を一疋提げて、一方の凹所から登つて来て、

湯ヶ島 先生、お見事でございました。中々大物でございます。

あちらでも五六頭しとめました。

此のうちに農兵らも獲物を携へて、おひく／＼登つて来て、よろしく整列する。

湯ヶ島は先刻の遺恨がまだあるらしく、澤野に向つて、

湯ヶ島 お慰みにとも存じて、わざとこなたへ向け、三頭まで狩

出しましたのに、佐久間どの、あの元込め銃とやらの
お手際を拜見することの出来なかつたのは残念でござつたなあ。

と當てこするやうにいふ。佐久間それをじろりと見やつて、

佐久 (江川に) さすがは多年の御鍛錬、あざやかなことと
ござつた。しかし、獸類はたゞ一二疋で、只管逃走するのみ
のものでござるから、たゞちに第二發、第三發とつゞけ
ずともようござるが、雲霞の如く競ひ來る洋夷どもを
打退けるには、いかゞでござらうか。手前は此の「元込
め」に尙此の上の新意を凝らして、迅發銃とでも命名す

べき、西洋にも類のない鐵砲を造らうと工夫中ではござる。いづれまた程なくそれを携へて御訪問申すでござらう。今日はこれでお暇申す。

江川 さやうでござるか。途中とは申しながら、これはまた餘りのお匆々。何のおもてなしもいたさんで。では御機嫌よう。

と雙方よろしく會釋あつて、佐久間主従はもと來た方へ去る。

湯ヶ島 先生、餘りと申せば高慢な、無禮な仁でござる。

藤田 藤田彪
號は東湖
水戸藩の俊傑
安政二年(二五五)
歿
年五十

江川 水戸の藤田にも次ぐ英物だが、今見ると、不思議にも劍難の相が見える。或は其の終を全うしないかも知れん。……大分日も傾いた。もう一調練して歸らうか。

兵は凶器
勇者逆徳也、
兵者凶器也。
(國語)

……あゝ。兵は凶器だが是非に及ばん。戦を好めば必ず亡び、戦を忘るれば必ず危し。かうしてお互に兵を練るのは、畢竟するに、戦を以て長く天下の戦を止めたい許りにするのだ。お手前達も常に此の志を忘れまいぞ。……氣を付け。

と號令かたの如くよろしくあつて先に立つ。一同肅々として従ふ。(わがベージエント劇 野外)

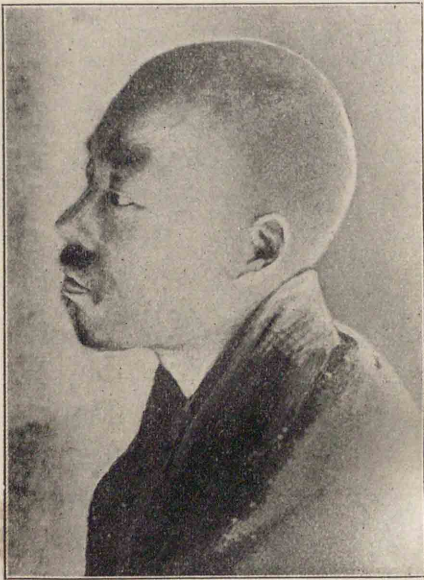
一六 果物の趣味

正岡子規

果物ほど味の高く清きものはあらじ。小兒もこれを好み、仙人もこれを食ふとか。青梅は酸くして口を絞れども、鹽

正岡子規
名は常規
俳人
歌人
愛媛縣松山市生
明治三十五年歿
年三十六

少しばかりつけんには、味言ひがたし。杏は乾からびて賤しく、李は水多くしてあさはかなり。苺は西洋苺を良しとす。されど行脚の足草臥れて草鞋の緩みたる頃、巖の角に



正岡子規

腰打据ゑて汗を拭ふ手の下には、はしなく見つけて取りて食ひたる、味は問はず、時に取りていと嬉し。枇杷はうまけれど、種子大きく肉少なきは飽かぬ心地す。桑の實はなべての人に知られねども、果物の中、これを外にして甘きものはなし。

王母
西王母
漢の武帝に三千年に一たび實の桃をすゝめたといふ仙女

晝餉さへしたゝめずに貪りたる木曾の旅の思ひ出でられて懐かし。夏蜜柑・ザボンの類、俗を離れて涼し。さして良しとはあらねど、少し病みて飯すらえたうべぬ時など、またなきものとぞ覺ゆる。梨は涼しく潔し。南窓に風を入れて、柱に倚り、襟を披き、片手にて團扇を持ちながら一片を口にしたる、氷にも優りてすがすがしうこそ、^{まろ}林檎は北海道の産を最上とす。齒にさはれば形消えて、涼やかなる風味ばかり口の中に残りたる、^は仙人の薬にも似たらんか。桃は種類多し。善きも悪しきもあり。王母後園の風味は知らねど、總べて世に詔はぬところ、一段高き趣あり。

栗は賤し。甘藷と較べられたるも口惜し。柿は野氣多く、冷やかなる腸を持ちながら、味はいと艶やかなり。多血性の人、世を厭ひて里に隠れながら、なほ物に觸れて熱血を迸らすにも譬へんか。柚子は氣高けれど食ふべからず。石榴無花果のわれから裂けたるは食ひ劣りぞする。葡萄は甘からず、澁からず、人に媚びず、さりとして世に負かず、君子の風あり。

我、この夏頃よりわけて果物を貪り、物書かんとすれば必ずこれを食ふ。書きさして倦めばまたこれを食ふ。食へば則ち心涼しく、氣勇む。氣勇めば則ち想涌き筆飛ぶ。我、力を果物に借ること多し。

日毎々々十顆の梨を食ひけり。

柿食うて洪水の詩を草しけり。 (子規全集)

一七 柿二つ (性格描寫) 高濱 虚子

ランプの光は靜かに更けて行つた。時々上野の森に反響して轟き過ぐる汽車の音があるばかりで、根岸の夜は沈んだやうに淋しかつた。

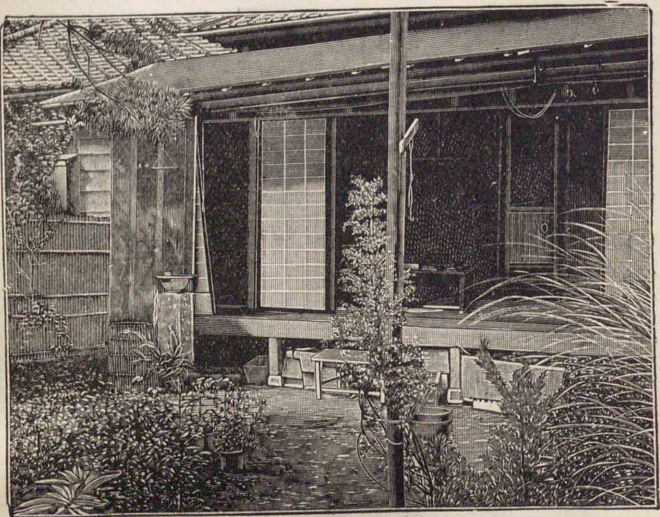
日によつて不定ではあるけれども、此の頃は一體に彼の熱は夜に入つて下ることが多かつた。夜中頃から再び上るのではあるが、其の平熱になつた時の心持は、流石にすがすがしかつた。病主人の頭はさう云ふ時に一層透明になる

高濱虚子
名は清
併人
明治七年愛媛縣
松山市生
上野の森
東京下谷區上野
公園の森
根岸
上野公園の北の
麓にある地
正岡子規の住宅
はこゝにあつた

のであつた。彼は自分を神かと疑ふばかりの明快な判断を數かぎりない句の上に下すことが出来た。句の良否は色の黑白の如く明白に、一見して立ちどころに判断するところが出来た。自分で自分をあやしむ位に、それが容易に且迅速であつた。

彼の淋しい家庭には、六十を過ぎた老母と今年二十七になつてまだ嫁がない妹とがあるばかりであつた。老いたる母も、嫁期を失した妹も、唯主人の病を看とるために生きてゐた。二人は次の室の暗いランプの下で、病室の物音に耳を敲てながら、各黙つて針を運んでゐた。それが病主人のやがて妹は膝の絲屑を拂つて立上つた。それは病主人の

枕許に盆に載せた柿を運ぶためであつた。



食うた。中にも柿は飽くことを知らなかつた。

「もうこれきりかい。」と彼はながし目に其の盆の柿を見ながら聞いた。

子 「昨日あんなにお食べたから、
親 もうこれぎりよ。」と妹は答へた。
鹿 盆の上にはたゞ二つしかのつてゐなかつた。

彼は總べてのものに健啖である中に、殊に果物を好んで

彼は忽ち食指が動いたのだが、たゞ二つの柿を今食つてしまふことは心細かつた。それは是非とも今日の大事業――投書函の一掃――が完了した時の慰藉の料に取つて置かねばならなかつた。彼は心のうちで呟いた。

「選がすんでしまつたら、此の柿を御褒美に遣るよ。今一息だ。たゆまずに片附けてしまへ」と。斯くて漸く底の見えて來た句稿の選に、更に一心不亂に取掛つた。

燈火は主人の心を知るかのやうに、瞬きもせず、牙え渡つた。傍の火鉢に炭のつがれた事も、時計が十二時を打つた事も、老いたる母の寢床に這入つたことも、彼は知らぬではなかつたが、其等は餘り深く其の注意を惹かなかつた。妹が床

に這入つたのはそれから一時間も後であつたが、それは其の物音が兄の仕事の妨にならぬやうに、いつふせつたとも分らぬ位ひそやかであつた。

静かな沈んだ夜の呼吸が聞えた。彼の目は燈火に光り輝いて、此の夜の色の中にひとり帝王のやうな威を示してゐた。

最後に手に當つた草稿を見終つた後、彼は念のため投書函をかき探して見たが、もう其處には一枚も留めなかつた。彼は朱筆を投げ棄てたまゝ、兩手で頭を抱へて暫く身動きもしなかつた。

久しく心に掛つてゐた仕事を片附けてしまつた慄へるや

うな満足の情と、病軀に不相應な努力のあとに來る疲勞の
恐とで、彼の心は暫く搔亂されてゐた。が、やがて其の頭を
抱へてゐた手をほどいて蒲團の外に現した彼の顔はいよ
いよ興奮して、蒼白い皮膚の中にも、頬のあたりの赤みは色
を増してゐた。

もう時計は二時を過ぎてゐたが、彼は少しも睡いとは思は
なかつた。燈火を中心とした此の病床六尺の天地は、今は
何物にも煩はされることのない極めて自由な、希望に充ち
た世界の様に思はれた。今や彼の體温は再び上つて、其の
爲にいつもの酒に酔つた様を興奮した心持になつてゐる
のであるといふ事には氣がつかうともしなかつた。

愚庵
俗名天田五郎
明治三十七年寂
年五十一

天龍寺
山城國葛野郡嵯
峨町にある臨濟
宗の巨刹
京都五山の
一
峨山和尚
俗名橋本昌禎
天龍寺派管長
明治三十三年寂
年四十九

彼は煩はしげに盆の上の柿を見やつた。柿の赤い色は媚
びる様に輝いてゐた。抑へてゐた彼の食欲は猛然として
振ひ起つた。彼は餓ゑた虎が殘忍な眼を光らせて兎を擱
む様に、忽ち其の柿の一つを取上げて、皮をむき始めた。
此の柿は、京都伏見の桃山に庵を結んでゐる愚庵といふ禪
僧から贈つて來た釣鐘といふ珍しい名の柿であつた。さ
ういへば形がどこか釣鐘に似てゐた。此の禪僧といふの
は、維新の戰亂に母と妹とが生死不明になつてしまつた其
の行方を何十年かの間探したが、遂に見當らなかつたこと
が動機となつて、中年から天龍寺の峨山和尚の鉗槌の下に
僧となつた人であつた。主人は既に數年前から交遊があ

つたのであるが、此の禪僧も主人と同じく肺を病んでゐる上に、萬葉調の歌をよくし、又書に巧であつた。俳句はやらなかつたが、其等の關係から互に推重して、何かにつけて贈答を怠らなかつたのであつた。今度の柿は、桃山草庵に禪僧を訪ねた人が、其の庭前の柿を託されて、遙々と携へて歸つて病床に齎したものであつた。

それは昨日の事であつた。其の人がまだ枕頭に在る間に、彼はもう辛抱が出来なくなつて、其の柿を三つ續けざまに食つた。其の人が歸つた後も、夜寐る迄に十ばかり平げた。今夜枕頭に運ばれたものは其の残りのたゞ二つであつた。彼は其の一つを取つて其の皮をむくより早く、忽ちそれに

武者振りついたのであつたが、もう大方食盡して蒂の所に達したとき、少し顔を擧めた。それは稍、澁かつたのであつた。さういへば昨日食つたのも大方は少しづつ澁かつたのであつた。けれども彼はそれに頓着せず、其の蒂の所の際まで少しも残さずに食つてしまつた。

○ 三千の俳句を閱し、柿二つ。

常用日記に、彼は毎日の出来事を句にして十句宛書くことを日課にしてゐた。明日になつて今日の部を認める時に、忘れぬやうに此の句を加へねばならぬと思つた。疲勞が一時に出て来るやうに思はれて、頭がぐらくした。彼は始めて熱の高いことを覺えたのであつた。(柿二つ)

安倍能成
哲學者
明治十六年愛媛
縣松山市生

一八 子規の面目

安倍能成

子規の遺稿にはまだよく親しんで居ない。此の間私の友達の一人が亡くなつて、その遺書を賣つた時に、私はその中から子規遺稿の「竹の里歌」と「小品文集」とを求めた。兩方とも粗末な表紙の薄つぺらな本であつた。その外に虚子氏の「柿二つ」をも買つた。「柿二つ」は前にも一度讀んだことがあるのだが、また讀みたくなつたからであつた。私は數晩續けて床に就いてから眠るまでに、子規と作者自身とを題材にしたこの小説を讀んだ。人によつては、この小説に出た子規は虚子の見た子規であつて、子規其の人の面目とは

筆蹟

天下の人あまり
氣短く取いそぎ
候はゞ大事出来
申間敷候
吾等も餘り取い
そぎ候ため病氣
にもなり不具に
もなり思ふ事の
百分一も出来不
申候併し吾等の
目よりは大方の
人はあまりに氣
長くと相見え申
候

全然違ふといふかも知れない。しかし私はこの小説の中に現れた子規の生活境涯、性格等に非常に興味を覺えた。

そこには虚子氏の主觀的見解もなくはないだらうが、とに

天下の人あまり
氣短く取いそぎ
候はゞ大事出来
申間敷候
吾等も餘り取い
そぎ候ため病氣
にもなり不具に
もなり思ふ事の
百分一も出来不
申候併し吾等の
目よりは大方の
人はあまりに氣
長くと相見え申
候

(録漫臥仰)蹟筆規子

かくに子規といふ人の争はれぬ面目が出て居ると思つた。私は「柿二つ」で刺戟された興味によつて、子規の眞筆をそのまゝに刻した「仰臥漫録」を讀んだ。これは前から感じて

居たことだが、子規の字がうまいといふことを又新に感じた。實際子規の一統は皆字がうまい。殊に手紙にかく位の大きさの字がうまい。私の知つてゐる子規の伯叔父の數人、及び子規の従弟の數人は、皆氣がきいて嫌味のない點に於て子規と通ずる所のある字をかく人達であつた。日の食事をしるした様な文字までが、普通の人のならば好い加減に讀み過す筈であるのに、妙に人をつかまへる力を持つて居る。何も大した議論をするでもなく、又華やかな空想を馳せるのでもなく、珍しい材料を使ふのでもなくて、日常茶飯のことが飾らぬ文章でそのままに書いてあつて、而もそれに力が充實して居る。泣いたり、笑つたり、愚痴を

こぼしたりする、凡人の心の動きでありながら、而もそれが空虚でない。私はそこに感心せずには居られなかつた。子規は自分のいふことがつまらぬかどうかを考へるよりも、先づ自分の考を肯定する、それを眞向に主張し得るといふ類の人であつたらしい。そのことが恐らくは子規が世を動かした最も重大な原因であつたらしい。子規が後輩に向つた態度にもやつぱりさういふ所がある。とにかく柿を一つかじる中にも、まぐろを一切食べる中にも、子規は生きて居た。そこが及び難いのだといふ感がして來た。私はかく感じた子規の性格に對する興味から、暇を得るに従つて子規の遺稿を讀まうと思ふ様になつた。(山中雜記)

戸川秋骨

名は明三

文學者

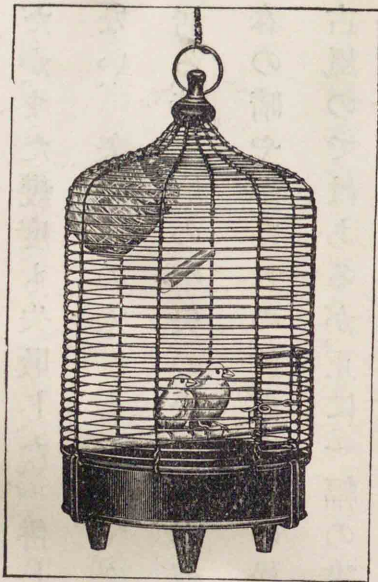
明治三年熊本縣

生

一九 文鳥の死

戸川秋骨

ある日掃除のために文鳥の籠を下の臺から外した。すると、それが急場に買求めた出来合の安籠であつたので、下に渡してある幾條かの竹の筋が甚だ疎隔して居て、即ちその一條と一條との目が甚だあらかつた。ゆゑ、最後に捕獲した文鳥は、籠が臺から離れるや、忽ちその身體を竹の間からすつぽ抜けさして落してしまつた。これは文鳥自らにも意外な事であつたのだらう、決して逃げる積りで故意にその身を落したのではないらしい。どうも其は鳥の顔つきで解る。笑つてはいけない、鳥にだつて表情はある。私は一



文鳥

寸あつけに取られてしまつた。文鳥もこれはどうしたんだと云つたやうな顔付をして、一寸まはりを見まはした。併し兎に角身は籠の外に出してしまつたので、文鳥は何を置いてもといつた工合に、庭の樹木を目がけてその方に飛んで行つてしまつた。

文鳥は自由の身にはなつたが、矢張例の粟の問題に苦しめられるといふ事は知つて居たのであらう。一時何處かへ姿を隠してしまつたが、暫くすると庭の木に歸つて来て、此方を見て居る。これは

やがて又籠へ歸つて來ると見込をつけて居ると、果して以前やつたやうに籠のまはりに來た。其處で又私はしきりに工夫をこらして捕へようと、以前の方法を幾度も繰返したが、また幾度も失敗した。併し鳥は決して遠方へは行かない。矢張庭の木にとまつて、なつかしさに此方を見て居る、特に庭の中央の松の高い枝にとまつて。春の晴やかな日の、鮮かな翠の松に止つて居る文鳥は、少し古風ではあるが、正に一幅の畫である。鳥が逃げたので、私は幸ひこの珍しい、めつたに味はれない風情を楽しみ得た。そのまゝにして置けば、或は永くこの趣を楽しみ得て、小さい籠の内に入れて見て居るのよりも餘程よかつたかも知れない。

何のために苦心して、先方には勿論いやな牢の中へ押込めようと力めたのであるか、自分ながら理窟がわからない。無論所有といふ下等な考が無闇に働いて居たのは事實である。それに丁度親類のものが來合はせて、「このまゝ棄て、置けばいづれ大きな鳥の餌食になる。飼鳥の逃げたのは皆さういふ事になる」と、さもかういふ場合の禽鳥の運命を心得て居るかのやうに言つたので、全く利己心からでもなく、多少保護を加へるつもりも加はつて、かく再び籠に入れようと力めたのではあつた。が、まあ辯疏はさうとして、さて幾度かの失敗を重ねて後、籠を以前のやうに座敷に入れて置くと、鳥も亦以前の通りに入つて來た。

私は時分を見計らつて、外から急いで障子を閉めた。するとかはいさうに！ 間髪をいれずとは正しくこの場合の事か、秒時の遅速もなく、私のしめた障子は丁度逃げて行く文鳥をはさんでしまつた。前後に無限の偉大なる時間をも有しながら、たとひ兩者の利害が結局其處へ來る傾向をもつて居るとは言へ、秒時の差もなく、兩者がぶつかり合ふとは、人爲か、運命か、悲劇か。どうもこんな場合、天といふやうな考が出て來て、諦めさせる事をよくするものであるが、まあそれより外に仕方があるまい。私は急いではずまつた文鳥を手の内に収めた。實にたわいのないものである。始めは大した事でもないやうに見えたので何とか助ける

道があるかと思つたが、さう思つて居る内に息は忽ちに絶え、見る／＼その紅の嘴は色を失つて紫色を呈して來た。そして、ぐたりと私の掌の中に身を横たへてしまつた。その柔かい手ざはりには、殊更氣の毒といふ感を強くする。私は何と考へてよいのか、考へ方に當惑してしまつた。どうも自分の動機はそれほど悪いとは思はないが、結果は甚だしい悪い事になつてしまつた。否、私は自分に説法をしたり、理窟を言ふのはやめよう。只文鳥の靈は永久に去つてしまつた、空に歸してしまつた。やがて僅かばかり土を掘つてその屍を葬つた。子供は庭の草花を取つて來て、玩具の小壇にさして、それを墓の前に置いた。

残つた三羽の文鳥は何も知らない顔をして矢張りよくと鳴いて居る。(文鳥)

川上眉山

名は亮

文學者

明治四十一年歿

年四十

四日

月

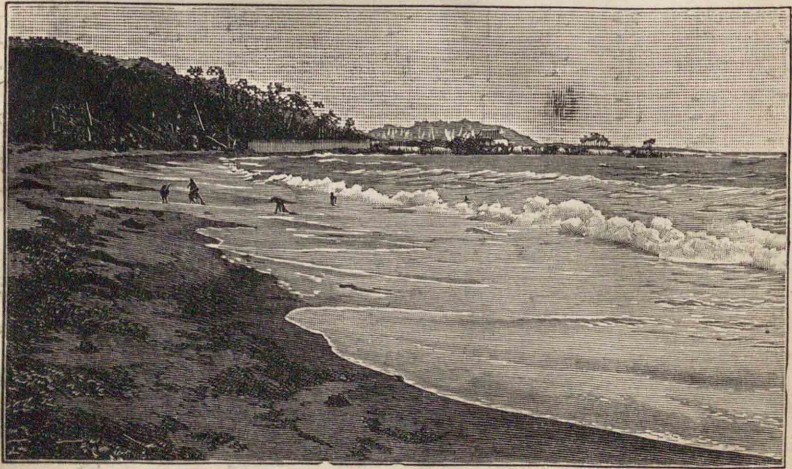
宿

神奈川縣三浦郡
逗子町の旅宿

二〇 三浦路

四日早起昨夜起草したる稿を繼ぐこと少時別に私書二通を認めて日高く宿を出づ。村松風は靜かに醉を吹きて浪いとやさしげに磯を打つ。空は晴れたり。見渡す島山は打霞み、雲雀は高く上に鳴連れて、さながら春の心地す。道は更によし。一帯の沿岸、風色すべて佳なり。森戸の川を渡るに、一岬、松深く風情優しき所、こゝに明神の祠あり、千貫松とやらありと聞きしかど今は見えず。岩礁漸く繁し。

已にして一岬高く出でたる
長者ヶ崎の上に出づ。風景
更に佳なり。由井ヶ濱、稻村
ヶ崎、七里ヶ濱の波は玉を展
べて、江の島山は盆石を浮べ
たり。長井の荒崎は南に長
く、天神ヶ崎は近く、三浦の岬
は遠く、蒼々幾十里、大島の煙
はほのかに空をかすめて、伊
豆の山脈は蜿蜒としてはる
かに雲煙の間に出没す。



岸 海 山 葉

我が富士なるかな。いづく如何なる時にも秀いよ〜秀
に、從容迫らず、麗しけれど（復みあるから）侮られず、靜かに扶桑の美を收め
て高く雲表に傑出す。折しも薄靄モヤかすかに裾を罩めて、空
の匂いと深し。我が富士なるかなと（ほめて）獨り斷崖の上に立ち
て暫し去ること能はざりき。

大崩おほくずれの下を過ぎ、浪打際を縫うて處定めず行く。十歩一景
を生ず。風光到る處によし。已にして暫く田畦ケの間に入
る。僧侶三四、年賀の配物持たせて各戸を廻るに逢ふ。前
を行く野夫に語らひ寄りて道を共にするに、いとをかし。
苦打くたつ竹を擔かたげて行くもの、魚籠肩に急ぎ來るもの、まだ正
月を遊びありくもの、背負梯子うしろに焚木負ひて熊手の

せて歸るもの。處を問へば、此處を蘆名とかや。連（まこと）の男我
が爲に遠廻りして、導きて又渚に出づ。

鹿島といふは、こゝらあたりなるべし。白砂前に走り、青松
後を繞りていと麗らかなる入江なり。海風ぎて鏡の如し。
見渡す方はみな打煙りぬ。投網を手にしたる男三人海中
に立ちて、鰯いわしの寄り來るを窺ふ。一群の子女、紅紫を交へて
渚に立てり。眞砂まごを踏んで屈曲したる濱邊をなほ行くこ
と少時、僅かなる鹽田を見る。鹽焼く煙もあらばと思へど、
まだ閉ぢたればなし。空は霞み渡りて、浪いよ〜優なり。
のどかに打語らうて徐歩して長井の村に入る。連の男の
酒を好むといふに、飲ませんと思ふ興深く、強ひて酒亭に案

内せさす。土藏づくりの中二階に通され、窓を開くに、海そこもとに近し。丸裸なる漁家の兒群三十人ばかり、手に手に注連繩を持ちて地を打叩き、出さないな、出さないものはがにくぞう。とのゝしり合ひつゝ相追うて走る。

(眉山美文集)

杉村廣太郎

號は楚人冠

東京朝日新聞記者

明治五年和歌山市生

ペンギン

Penguin

二二 ペンギン鳥

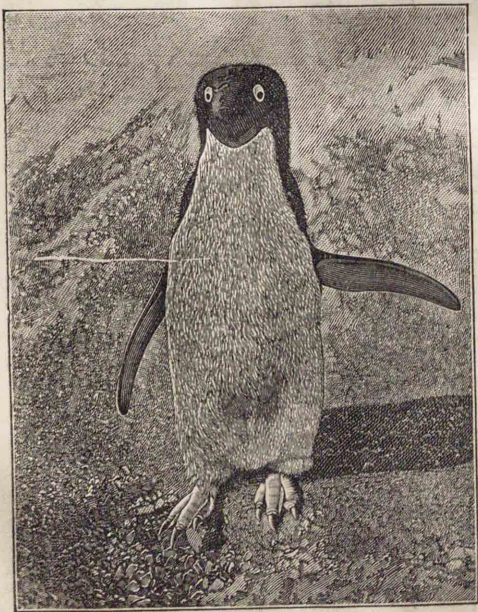
杉村廣太郎

春の來らんとする南極の曉を待ちわびて、何處よりともなく南極圏に押寄する一群の奇怪千萬な鳥がある。これが氷の上に泳ぎ着くと、さながら隊伍を組んだやうに打連れ

て、一様に立つて歩いて行く。これがすなはちペンギンである。

凡そ天下にペンギンほど人を馬鹿にしたものはない。ぎよろりとした目玉を光らせて、人間のやうに兩脚でえつちらおつちらと立つて歩く。脊中には黒、腹には白の綿毛が一ぱいに生えて、兩の翼が短く垂れてゐる。翼といつても、短いから、これで飛ぶわけに行かぬ。唯時々これをふたふたと上下に叩いて、一には身體の調子を取り、一には之を敵と戦ふ時の武器に使ふ。見たところはさながら小作りな人間が黒の燕尾服に白のチョッキ、白のズボンで、兩手を振つて歩くやう。ことに或種のペンギンは、丁度襟の處に黒

い線があるので、まるで黒の襟飾を締めたやうにも見える人間に似た所はこればかりでない。ペンギンとペンギンとが出會ふ時は、互にお辭儀をするやうな體で首を下げる。春先此の南極圏へ移つて來て、然るべき處へ銘々の巢を作つてしまへば、農閑の伊勢詣とでもいふ風に、大勢團體を組んで旅行に出かける。其の出かける時は一人の總指揮官があつて、一同は其の命に従



ペンギン

つて連れだつて行く。ペンギンの植民地ともいふべき處には、何十萬といふ大變な數が一所に集つて巢をくふが、其の間に何等かの制裁が行はれるものと見えて、餘り甚だしい喧嘩はしない。中には、近所に親を失つたみなし子鳥が心細げに巢に取殘されて暮してゐるのを見ると、自分の手に引取つて、養育一切の世話をやくといふやうな義侠心に富んだものもある。又此の鳥は大變な見え坊で、胸の白いところが一寸でも泥にまみれて汚れてゐると、仲間の鳥どもが例の人を馬鹿にしたやうな顔を見合せて互に嘲り合ふ。こゝらも頗る人間に似てゐる。「善惡共に似た所が餘り多いので、何だか之を殺すには忍びなかつた」と、探檢家の

ノルデンショル
ド
Nordenskjöld
(1832—1901)
瑞典の有名な探検家

ノルデンショルドも言つてゐる。種類は色々あるが、其の立つて歩くことは一つである。翼が小さくて飛ぶことの出来ぬ者が、どうして海を隔てた北の方から涉つて来るかといふと、これは前にも言つた通り泳いで来るのである。泳ぐのは魚類のやうに身體の調子で泳ぐのであつて、兩翼は唯其の釣合を取るに止る。泳ぐに脚を使はぬことは、兩脚に繩をつけて小舟を曳かせると平氣で泳いで行くのでも知れる。水では泳ぐが、陸では歩く。所で敵に追ひかけられたとか、何とかで、大急ぎに駆けださうといふ時は、忽ち身を倒して腹這になつて、一瀉千里の勢で櫂この様に氷の上を滑り走る。

其の早いことは到底人間業では追ひつけぬ位である。

二

春深き九月十月の頃になると、ペンギンは盛に此の南極圈内にやつて来る。來ると先づ第一に穴を掘つて、巢を構へる支度をする。

やがて雌が卵を生む。卵は大概二つしか生まぬが、之を親鳥が代りくゝに温める。卵を温める時は、百千萬羽が銘々思ひくゝの方へ顔を向けてゐるが、さて一朝にして嵐が吹出すとなると、言ひあはさねど、百千萬羽一齊に盡く顔を東南に向ける。ペンギンは南極圈内の嵐が常に東南から吹くのを自然と心得てゐるから、風の方に顔を向けないと、吹

飛ばされるのを恐れて、かうするのである。子鳥に出来るだけ澤山物を食はせて、出来るだけ腹を膨らせておくのは、一つには營養の爲であるが、一つにはかうして据りをよくして風に吹飛ばされぬやうにするのだといふ。卵が孵つて子鳥が出来ると、又もや親鳥が代り合つて、一方が餌をあさりに出かければ、一方は子鳥の番をする。折節子鳥が這ひだして、歸途に己の巢を忘れることがある。己むを得ず其の邊に有合せの餘所の巢へのたり込むと、無愛想なのは四の五の言はせず嘴でつゝき出してしまふが、中には其のまゝ食客となつて入り浸つてしまふのもある。己の巢を見失ふのは子鳥許りではない。何しろ何萬とい

ふのが一所に恰好の似た巢を構へてゐるのだから、親鳥と雖も時としては巢を忘れる事がある。中には理不盡にも他人の巢へ押寄せて、力づくで主人を追出すのもあり、主人の不在らしい巢を見つけ出して、其のまゝ轉がりこんでしまふのもある。時としては、兩敵互に巢の奪ひ合ひで戦つてゐる中に、雙方へ助太刀やら干渉やらが始つて、一大混戦を此の植民地内に演ずることもある。ペンギンは平生おとなしい平和な鳥だが、いざ喧嘩となると中々強い。嘴でつゝく、脚で蹴る、例の短い翼でひつばたく。犬などは屢々負ける。ひどく翼で叩くと、人間の腕位は折れるといふ。

三

此の烈寒無人の境に在つて、ペンギンは何を食つてゐるかといふと、主として魚類である。南極地方の海には一種の小蝦がゐるので、之を又好んで食ふ。其の他各種の軟體動物も食へば、海草の類も食ふ。人間が水を飲むやうに、ペンギンはしたゝかに雪を食ふ。ペンギンを殺して腹を割いて見ると、胃袋には必ず小石や砂利がある。小石や砂利までも食ふものと見える。

ペンギンは寒さを知らぬ。如何に寒い時でも、平氣で水中を泳ぎもすれば、平氣で雪の中を歩きまはりもする。何しろ彼の暖かさうな毛皮があつて、其の下には厚い脂肪がある。暖いのも道理である。こんな話もある。ペンギンが立錐の地を遺さず集つて來た夜、大風雪が吹きすさんで夜一夜やまなかつたが、さて翌朝になると、さしも何萬といふ數を知らぬ位集つてゐたペンギンが、一夜の中に殆ど半分に減つてゐた。さてはさすがのペンギンも風に吹飛ばされたか、雪に凍えて死んだのだらうとばかり思つてゐたら、いづくんぞ知らん、此等姿を隠したペンギンといふのは、盡く雪の下に埋つただけで、やがて晝近くなつて、世間が大分暖まると、一同申し合せたやうに雪をかきわけてもぐり出て來たとのこと。²

ペンギンのはかはい、恰好の鳥である上に、其の容貌動作が、



ペンギン鳥の群居

如何にも滑稽^{ケツ}じみてゐるの
 で、極地探検家の無聊^{ムリョウ}を慰め
 ること一通りでない。第一
 に人を人とも恐れず、まるで
 友達のやうに人の側へ寄つ
 て来て、何やら話しかける。
 蓄音機でもやれば、大勢で之
 を聴きに來る。さうして互
 に顔を見合せて、如何にも感
 に堪へたやうな顔をし合ふ。
 それに又容易に人に馴れる。

オムレツ
 Omelette
 ハムエッグス
 Ham eggs

或時之を二羽捕つて來て、名をつけて、餌を與へて愛養して
 ゐた者があつた。するとかはいゝかな、彼等は腹がへると、
 其の人の指をつゝきに行き、遠く遊びに出てゐても、名をさ
 へ呼べば飛んで歸る。さうして其の人が一たび外に出る
 と、二羽ともひよこゝと尾を振立て、ひたもの其の後を
 追ひまはして、ついて行かねば承知しなかつたといふ。
 ペンギンの用はたゞ此の慰みになるばかりでない。春風
 がそよよと吹く十月頃には、これが大きな白い丸い卵を
 生む。これでオムレツを作り、ハムエッグスを作り、さては
 卵酒をさへ作る。
 卵ばかりかは、其の肉も食へる。南極探検家には、生肉を食

ふ必要があるので、ペンギンの肉が盛に用ひられる。其の味は魚と鳥との合の子みたいだといふが、ペンギン自身が魚と鳥との合の子である。背中には鱗のやうな羽が一面に生えて、兩脇には鰭のやうな翼がある。さうして魚のやうに、水の中で一生の大部分は明し暮す。

四

近頃よく「をさまつてゐる」といふ言葉を使ふ人があるが、ペンギンの容體は、此の「をさまつてゐる」の一語に盡きる。ペンギンほど大をさまりにをさまつたものはあんまりあるまい。僕の見たのは一尺位のものだつたが、これが例の燕尾服白チョッキですまし返つて、水際をうろついてゐる所

は、いやはや呑みこんだものであつた。身の丈三尺もあるといふ種類のをさまり方が思ひやられる。

何分氷雪の外に見るものゝない處とて、よくく無聊に苦しむものと見えて、何かかはつたことがあると、ペンギンどもは随分遠方まで見に来る。大勢で来る時は、必ず指揮官が一人ついて、其の指揮に従つて行く。彼のシャックルトンの一行が自動車を動かしたり、冬營の小屋を建てたりしたのが、ペンギン社會の大問題となつたと見えて、如何にも珍しさうに熱心に見に来たといふ。

大勢連れのペンギンが、途中で人間か犬かに出會つた時は大變である。假に彼方から人間が來たと見ると、ペンギン

シャックルトン
Shackelton
(1874—) 英國の有名
な南極探検家

一同遠くではたと立ちどまる。先づ一行中の雄が一羽出て、恭しく頭を下げる。やゝ伏目になつたまゝで、何やらん長々と挨拶の言葉がある。不幸にして人間には唯カ、ガア／＼と聞えるばかりである。挨拶の詞が終つて後、始めて頭を上げて、今度はずつと仰向いて、嘴で大きな輪を一つ書いて、さてひよつと人の顔を見る。「お分りになりましたか。」と言ふ風だ。

初めから

もとより以てお分りになるべき筈のものでない。人間はぼかんとして立つたまゝだ。此に於てペンギンは、此奴分らぬわいと見て取つて、今一度前の挨拶を長々と繰返す。それでも分らぬと見たら、今度は他のペンギンどもが、がや

がや言つて承知しない。そこで前に挨拶に出た男が、大いに面目を失つて引下ると、今度は代り合ひまして、代り榮えもいたしませぬ別の雄鳥が出て来て、又前と同じカ、ガア／＼をやる。相手が人間なら、譯の分らぬ長ぜりふも面白半分我慢して聞いてやるが、これが犬でもあつたら、それこそ騒ぎだ。或時ペンギンどもが右の順序で犬に挨拶をしたが、固より犬に分らう筈はない。そこでペンギンが腹を立て、三羽一時に例のカ、ガア／＼をやり出した。犬は面喰つてわん／＼と吠える。他のペンギンはきよとんととして呆れて見てゐる。之を見てゐた人間はいづれも腹を抱へざる

はなかつたといふ。

最後に断つておくが、ペンギンは南半球特有の動物であつて、最も多くゐるのは、南極圏内及び其の附近である。

(へちまの皮)

二二 シベリヤの旅

車内にごろりとしてゐても汗がにじみ出る暑いシベリヤを走ること二日、ウエルフネウージンスク驛のあたり、新しい勞農社會主義共和國聯合の國民たる蒙古人の多いのに興を惹かれ、そして彼等の目も亦物言はまほしげに我等の上に集るを感じつゝ、北へ、更に北へ、曠野をのたうち廻る怪

シベリヤ

Siberia

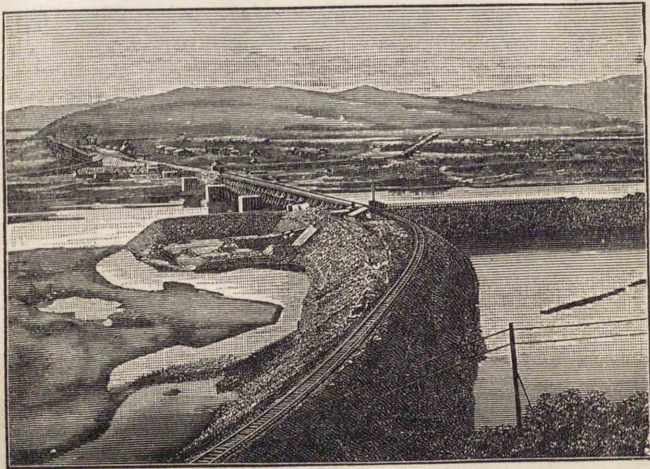
ウエルフネウー
ジンスク

Verkhne
Udinsk

獸の如く、われらの汽車は走りに走る。

その夜である。

夜といつても、故國の夏の夕方
の六時頃よりももつと明るい、
それで時計の針は十時を過ぎてゐるのである。汽車は、
シベリヤ名代の白樺の林に分けいつた。白樺といへばこゝまで来る道も、われらの
汽車は白樺を燃料として、夢の如く
淡く消える乳白色の煙を吐きつゝ、
進んで来た



西比利亞鐵道

のだ。漸く夕闇が迫つて來た。窓の左右は文字通りはて知らぬ白樺の林である。林の奥は晝尙暗しの感があるが、そこに茂る白樺の幹、さては枝のそれ、は暮れなやむ夕べの微光を吸つて、白金の如く、象牙の如く、怪しげなる光を放つ。白夜！ さうだ、白夜の國に入りつゝあるのだ。停るべき驛とてもないので、汽車は轟々又轟々、千古の深林の静寂を破つて突進する。吐きだされた煙がちぎれて、林に迷ひ入り、まだ芽ぐみもせぬ白樺の枝々に絡みつき、梢を傳ひ、銀と緑と黒を溶いて展べた鏡ともいひたい空に、また大自然の祕密をそのまゝ包むが如き林の奥の闇に、飄々として吸はれてゆく。

走りつゞくること二時間餘、さすがにわれらの怪獸も疲れたか、林を切り開き、白樺の薪を處狭きまで積んだ小驛に喘ぎ喘ぎ脚を停めた。給水するのであらう、それらしい響が前方機關車のあたりから聞えてくる。車外に出てみると、昨日とは打つて變つて、刺すやうな冷たい風が頬を撫でる。時計は十二時を過ぐる數分、日はもうとつぷりと暮れて、車内の人々の眠を守るやう、蒼く磨かれた星は空一杯、燦としてきらめいてゐる。われらは頭をあげて北とおぼしき空を眺めた。故國で見なれた北斗七星、彼の、何か意味ありげに並んでゐる七つの星を見て、懐かしいものに接する氣分を味はひたかつたのだ。ところがな

い、どう見てもない、いかにシベリヤは謎の國の一角だといへ、星まで消える筈はなからうと見直すと、何のこと、われらの頭上、正しく一線を描いたあたりにはあるではないか。北斗を頭上にあふぐところ、我等は、もうそんなところまで来てしまつたのかと、星に對してぼんやりものを思つてゐたら、發車の合圖の鐘が鳴つた。あわて、車上に駆けあがつた刹那、餘韻長う汽笛は鳴つた。

しばらくして寢ようと、ブランケットをかぶつたはよいが、しみとと寒い。また起き出して、慈母が手づから編んでくれたスエーターを着込み、外套やら何やら懸けて枕に就く。將に眠らうとしても、一度外を見ると、車窓を流れ出る

Blanket
ブランケット
毛布

Sweater
スエーター
汗襦袢

仄暗い燈光の末、林間ところどころに、残雪の皚々たるが目に入つた。

「大べら棒なシベリヤ！ 昨日の酷暑と比べてどうしたといふのだ。」

思はずも、かうつぶやいたのである。

どれほど眠つたであらう、幾度か寒氣に夢をやぶられつゝ、うとくしたと思ふ間もなく、また眼がさめた。と、汽車は、轍のきしり靜かに、危険な個所でも過ぎるのか、匍ふやうにして進んでゐる。「どうしたのだらう。」さう思つて、頭をもたげ、ひよいと窓外をのぞくべくカーテンをよせると、これはどうだ。麓を曉の闇に沈めた雪の連山が、巍々また蜿蜒

カーテン
Curtain
窓掛

星の消えのこる深い藍色の天空を背景に、ほつかりとうき

出してゐる

「あつ」といつたまゝ二の句のつげ
ぬわれらは、むつくり飛起きて窓
に倚つた。眼を凝らせば、大地と
思つた眼下は、森々たる湖水、水の
おもて、平板をやぶるものは、氷の
島にちがひない。——バイカル湖
だ。そしてバイカルの連山だ。
おゝ、こゝを眠り過して、どうして

バイカル湖
シベリヤ中部
の淡水湖
L. Baikal



シベリヤを通つたといはれようぞ。

バイカル湖畔

まだ日は地平線を出ない。

東から西へ、天空はくつきりと光の濃淡を織出し、雪の連山
の中腹以上のみが、その肌を見せたのだ。頂上は、いたゞく
雪を淡い紅にそめ、漸次麓に下るに従ひ、紅は紫に、紫は暗緑
色に、そして朦朧たる曉闇に、腰から下をひたしてゐる。

汽車は湖畔をうねり、幾度かトンネルを出ては渚を傳ひ、飽
くまでもしめやかに、さうだ、心あつてこの莊嚴なる湖畔の
曙の静寂を破らぬやう、行き行くのである。

まだ、日は出ない。

それでも雪の連山は、分また分ごとに衣をかへる。頂上の
薄い紅は漸く濃くなり、紫だつた中腹は、かはつて淡い紅に

トンネル
Tunnel
隧道

なつた。さうして麓一體、漸次にあざやかな紫に變じて行く。同時にまた、空の色、水のおもて、氷の島々、それが皆忙しく衣をかへる。萬象をして思のまゝのけはひをさせるべく、日もゆつたりと出るらしい。やがて、日が出る。巨人が光をつかんで、八紘に抛げつけたその瞬間！それは、世界創造の黎明、萬象はじめて形を得た歡喜に酔ふ刹那と何處がちがはう。今はそれだ。雪の連山は面はゆげにその肌の全部を見せ、麓の方、われらの對岸に當る湖畔一體、清淨純白の雪と氷は、まさしく喜に燃えてゐる。

日が地平線を離れる。

森々たる湖上、どれだけ廣いか見當もつかぬ湖上、それは、その涯を素絹の織目のやうに地平線に没してゐる雪の連山の屏風にまもられ、漣波一つさゝやくを見ない。のみならず湖面の半ば以上は、五月も末近いといふのにまだ氷原である。廿年前、卅七八年役の當時、われらが今走つてゐる湖岸の鐵道工事は、かどらぬ苦しさに、ツァール政府は、この湖の氷の上に鐵路を敷き、運輸をいそがしたはなしがある。その時、さすが堪忍づよい湖水の神も、靜寂と莊嚴を破られる腹立たしさから、氷の一角を破つて列車を沈めたと、傳説に近い實話が残つてゐる。生きながら氷の底に沈んだ兵

ツァール
Czar 露國皇帝の稱

士の靈は、今なほこのあたりに迷つてゐるであらう。
日が漸く高くなる。

われらの汽車は、湖畔を走る四時間餘、煙の出ぬ汽船が數隻、赤さびた船腹をのぞかせて埠頭に繋がるバイカル驛にいた。こゝで、給水である。乗客は皆起き出して、赤露政府の禁制とあつて寫眞器はかつぎ出せぬが、雙眼鏡などを携へて、渚に急ぐ。

まのあたり渚に来て見ると、水の清さはまた別段である。浮いてゐる氷の島々は、いづれも水面下に、水上の幾倍かの氷をかくしてをるが、さて、濁るを知らぬ水は乳白色にのぞかせて、折角隠した氷の苦心をむなしくさせてゐる。その

水の冷たさよ。

澄みきつた大氣、おゝ、呼ばゝ答へ、手を伸べなば湖面をわたつて來さうな連山、汝の神々しさはいづれの日までつゞくか。山に對してさながら大聖に對するが如く、黙々として見入つてゐると、脚下近く、氷の島の一角が碎け散つた。と見たのは氷の島ではなかつた、氷の上に翼を休めてゐた雪よりも白いセキレイ鶴鴿に似た小鳥であつた。唯一コイの生物―小鳥はいづこともなく飛んで行く。(東京日日新聞)

二三 浦潮より

太田 覺眠

拜啓野衾と川上事務官と共々最後の

浦潮
Vladivostok
の港
シベリヤ東部
太田覺眠
西本願寺派の僧
慶應二年(三三六)
伊勢國四日市市
生
川上事務官
時の貿易事務官
川上俊彦

引揚船して歸朝致すべき旨申上置以處
 西比利亞内地奥深く入込み居る同胞を諸
 河結氷のため水路の交通全く断絶致在外
 今日如何なる手段を取らむ引揚船出帆の期
 日迄に當港へ到着の見込到底如何なる幾百
 の同胞は餘儀なく残留する事にお成申候令
 後令々本國の保護を離れし心細く敵國內に
 残留する同胞の心情を察する時は野衲を
 如何よしともこの憐むづき同胞を棄てし

歸朝

由新するに忍びず断然敵國內に踏留る事
 に決心致候野衲この事を事務官に申出で
 たる時事務官ハ野衲の行方を以て政府の命
 令に背くものなりと一色を作志して止められたり
 且曰く君を露國政府の保護よ安んざんとする
 かと野衲曰く予は露國の保護よ安んざるものに
 あらずその危険よ甘んざんとするものなりとや
 貴官ハ居留民が唯一の頼とする帝國の國旗
 を收めて此の地を引拂んとす今後残留の目

胞はそれ誰より頼まむ予は身僧侶として此
 の人々の境遇を見て船よりと能く固よ
 り死は疾くも覚悟せりと事務官の突然起
 つて野衲の手を執つて曰く予は最早君の志を
 沮止せざらざし予も國民に代つて君の高義を
 感謝す予は我が政府に對し君一人を見殺す
 る責を甘んじて之を受かん君も佛院の大悲
 を發揮せよと相對して思ふに感涙は咽ぶや
 あつて曰く前程遠路なり相當の準備ありや

と野衲曰く一片の丹心一軀の尊像是我が為
 り千萬の味方なり而して囊中尚百金の餘財
 ありと事務官直に囊底を拂つて巨額の路銀を
 恵まれ且種々の注意を與へる候旅順用戦の
 事は已に聞得たり當港よの戒嚴令を布かれ
 ゆえ最早日本人の居位を許されず唯今事務官
 一行の乗込めり引揚船曳見送りたるん後にハ
 當港に日本人とては野衲唯一人として候目下
 露人の暴行よりも寧ろ支那労働者の家財

を奪もんとし、龍ひ来る勢甚だ猖獗を極め居候
 野神一人の力到底之を防ぐに由なく今夜八頭
 彌壇の下に隠れ、一夜城明け、彼等の掠奪
 を恣にする。免明朝一番汽車にてハロフスク
 に到り、順次黒龍江沿岸地方に残留せる同胞
 咸に慰問致すべく、野神より生還を期す
 ず。いづれも唯此の上は一日も永く命を保ち
 て一人もも多うの人々を慰問したまふ心願
 あり候野神の此の行必ず大悲の所冥見あら

世給ふを確信致候。遠く東方を望みて
 陛下の萬歳を祝し奉り候。匆々

明治三十七年二月十三日 浦潮斯德 澁川橋より

太田覺眠

二四 奉天占領の日 澁川 玄耳

三月
 明治三十八年

渾河
 遼河の一支流

三月十日。今日は我が半生における好記念の一日だ。
 昨日とちがつて、好い天氣。早且宿舍を立ち、一時間弱にし
 て渾河左岸の一村に達した。此處は家屋も壊されず、土民
 も落着いて居る様である。早速苦力を探す。三十餘の小

柄な男を連れて来た。姓名を聞いて布片に記して、上衣の襟に縫付けさせる。兎と米と予が毛皮の寢衣と炊事道具とを舊の苦力に、其の他を新苦力に分擔させる。村を出外れると直ちに渾河の渡渉點。小高い沙丘がある。登つて見ると、霞の裏に彷彿として奉天の城門が三つ四つ五つと歴々指點せられる。半歳冬營の苦しみも、連日行軍の苦しみも一時に拭ひ去られて、急に元氣百倍。

「やつ、上流に友軍が渡つて居る。第一軍だらう。」

「そら對岸に。あれ〜前進する。」

「下手の方のは我が聯隊の兵だらう。氷はまだ大丈夫だ。ちつとも銃聲がせんぢやないか。餘程遠くに往つてし



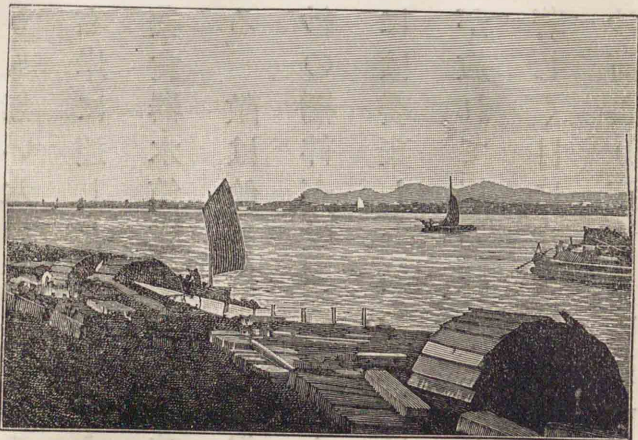
大 山 總 司 官 奉 天 入 城

まつたんだ。相變らず
退却の名將だなあ。

我等の渡河にはまだ多少の時間があるといふので、沙上に團坐して朝餉を食ひかゝる。綺麗な砂原だ。夏になつても多分草も生えなからう。處々にちらばつて居る小銃彈は味方のだ、昨夜あたり河を挟んで戦つたのであらう。上

下十數里、見ゆる限りの流域は我が軍を以て滿されてある。三竿高く昇つた日は、うらくくと河上の氷を照して反射する。實に予が曾て見得ざりし所の雄大な景である。飯盒の蓋を取れば飯の色が薄鼠色。昨夜の水が悪かつたと見える。ハンケチで漉したにも拘らず、無数の埃も雜つて居る。見ては食ふ氣になれないので、堅パンを少し咬つて、水筒の冷茶に咽喉をしめす。程なく渡河の命が下る。予は馬を離れて單身渾河の岸に下り立つた。處々氷の融けた處に土人の門扉らしい板が渡してある。河幅は十町より廣い。此の流、幾箇所か深い淵もあらう、萬一氷を踏抜いたらと思へば、無上に恐しくもある。しかし吾が前に

鴨綠江
朝鮮第一の長流
白頭山の西に發
し西南流して義
州に至り海に入
る



多の人々が渡りつゝある、上流にも下流にも怪我は無い様だからまづは大丈夫と自ら慰める。

鴨綠江の水に飲ふことすら、古來幾多の志士の希望として吟詠に上つたのであるを、今日唯今此の滿洲の眞中に來て、渾河の氷を踏破するとは何たる果報ぞ。いでや後日の話の種に氷を一つ嚙んでみようかと、底の砂の見える極めて浅い處に立止り、劍の鐙で突きこはす。

さて取上げた玲瓏たる一塊がり、とやれば、別に何のかは
 りも無い氷の味、冷絶舌を刺すばかり。
 右岸に達した。岸に沿うて一連の塹壕がある。夥しい彈
 藥、食器、水筒、靴帽子、外套、其の外種々雑多の物が散亂して居
 る。敵は餘程周章て、退却したものと見える。處々に更紗の襦袢が脱ぎすて、ある血が染んで居る。併し此の邊
 には委棄した敵の屍骸は一も見當らぬ。段々進むと、軍馬
 が放れて居る、豚が逃廻る、犬が頻と吠えたてる。
 著しく目に立つのは樹木が多くなつて來たことである。
 沙河より渾河までの一帶の地方は、彼我冬營の燃料に伐盡
 されたからでもあらうが、一村に五六本もあれば樹が多い

と眺めた位であつたに、渾河を越すと別天地、到る處に蒼鬱
 たる森林が展望を妨げる。何だか是迄の滿洲とは勝手が
 違ふやうだ。

前方の森の梢に聳えて居るのは奉天城。城壁が數里の遠
 きに互つて居る。前へくと一歩づつ近づくと思ふ中、何
 時の間にか我等の進路は東北に轉じたさうな。幾程もな
 く奉天を左に望む様になつて來た。俄かに停止。
 敵に追付いたと覺しく、どちらかわからぬが盛に砲を打始
 めた。

一民家に立寄つて白湯を求めると、居合せた家人は畏みて
 大釜の下を焚きつける。近く銃聲も起つて來た。愈、敵に

接着したに相違ない。同時に砲聲も益劇しくなつて來た。湯が煮え立つた。鞍囊の茶を取出し湯呑の中に浮かして一口二口飲んで居る中に、ばあんぱんぱん、屋根を掠むる爆聲。敵の齊射だ。家の前で騒がしい人聲がする。窓から覗いて見ると、一頭の支那馬が門前に斃れて、其のあたりは血に塗れ、一人の老翁を圍んで七八人の土人が土壁の根に寄添つてチーチーパ〜と喧しく囁き立て、居る。今此處に馬を牽いて這入らうとする處に砲彈が破裂したのだ。二三分間で砲聲が止む。敵は又退却したと見える。併し斯う近くなつては、到底今の砲も我が捕獲を免れまい。

せめて十門許もあつてくれ、ばい、が。又前進の命令。目標は前方の松林だとの事。つい見えて居るので、予は悠々茶を啜つて、それから畑地を横ぎつて乗りだした。千餘米も進んだ頃、又もや敵が砲撃を始めた。しかも例の急射撃。松林までは尙千餘米ある。その間は全くの平地で、逃げ先も隠れ先もあらばこそ、砲彈は會釋もなく前後左右に、或は空で開く、或は土煙を打揚げる。右へ遠廻りをしようと思ふ中、ばあんと間近く開いた一發に、馬が驚いて駈けだす。敵陣に飛込まれては一大事とあせるけれども、馬は荒れる、騎手は下手、どうにもかうにも始末がつかぬ。今は砲彈よりも馬の方が差迫つての危険。

どうか落ちるならば砂の上にと祈りながら、一所懸命手綱を操り、身を捻り、やう／＼の事に、馬上安全目標の地に乗付けた。

汗を拭ふ間もなく更に前進。司令部の旗は前方の丘上に翻つて居る。追ひ／＼に徒歩の連中も喘ぎ／＼追付いて丘の麓の枯芝に座を占める。荷物が軽くなつて居るので、苦力も格別後れずにやつて來た。

小丘を環つて點々たる數十の部落、いづれも皆煙が揚る。敵が退却に臨んで放火したのであらう。畑地には幾百となく、放れ馬が右往左往に奔逸して居る。

丘の上には大久保將軍を取巻いて、幕僚將校が謀議を凝ら

大久保將軍
時の陸軍中將
大久保春野

す模様。傳騎か斥候か知らぬが、騎兵の往來が頻繁になつて、何となく事ありげに推せられる。

奉天城を望めば、霞でよくはわからないが、瞳を凝らすと、北門より鐵嶺方面へかけて一道の砂埃の裏に何やら物のうごめく様、どうも人馬の行動らしい。更に東門の方にも同様の土煙が揚る。敵だらうか、友軍だらうかと、我等の盲判斷が決せぬ中、此方に向つて驀地に馳來る一騎あり、空を飛んでさながら閃電の如く、看る／＼丘の麓に達した。ひらり馬を飛下りて滴る汗を拭ひも敢へず、駆け上つて將軍の前に立止つた。一禮して曰く、「報告」敵だ。敵だ。兩方とも敵ださうだ。

すはや彼の大部隊の敵に兩翼より押包まれるのか、一大事と、危惧の眼に幕僚の方を望むと、流石に、本職は落着き拂つたもの、即座に部署を定めたらしく、數人の將校は立地に命を領して四方に馳せる。

丘の麓は俄かの活動。砲車は轟々として東南に向つて去る。歩兵は堂々として西と南とに分進する。各敵の來路を扼せんとする。瞬く間に陣地を定めて打出した。敵は漸次に接近して、近きは我等と七八町、弦月形の線を作つて包圍の形。しゅつくと敵の銃彈が丘の上に来始める。石に當つてかあんと響き、芝生に落ちて土を颯げる。予は師團長、軍醫部長と並んで、丘上の煉瓦壁内に據り、纜かに頭

部を露はしながら成行を氣遣つて居る。

刻一刻に近づく敵は、路を塞いだ我が歩兵と四五十間に密接した。今に白兵戦が始るぞと手に汗を握つて居る中、敵の兩三騎、將校と覺しきが隊を離れて陣頭に乗りだした。奇怪の振舞を爲すものかな。まさかに鎧踏張り立上り、大音聲に名乗をあげて居るのではあるまい。ともあれ不思議の事かなと見てある間に、我が線よりも徒歩の將校らしきが列を出でて立向ふ。敵の將校は馬を下りて相對した。やゝ暫し切合ひも始らねば打合ひもせぬ。何か話をして居る模様である。

は、あ降參だなど想つて居ると、程なく報告が來た。果然

果然。一里に互る大部隊を擧つて投降せんとの申込なりとの事。氣早の連中は愉快を呼び、萬歳を呼びて躍らんばかり。直様幕僚と通譯の七八人が命を受けて丘を下つて行く。司令部に屬する歩騎兵は悉く銃を執つて不虞を警める。併し銃數が僅か六十許しか無い。司令部の總員は二百餘人も居るけれども、多數は各自一口の劍を帯びるのみである。俘虜の收容は開始せられた。先づ武器を捨てしめ、指定の地に集合せしめるのが普通の順序。多分其の取計ひをして居るのであらう。ぞろ／＼と敵は皆此の小丘に向つて群集する。あたかも一基の磁石に鐵屑が吸寄せられる様。

今集りつゝある者のみでも三千や五千では無い、まだ續々城門から出て來るに違ひない。野戰に於てかゝる多數の投降を獲ることは未聞の快事。而も此の丘に立つて全幅の光景を眼下に瞰る事を得るのは何等の愉快ぞ。屈めて居た腰をのばし、上半身を煉瓦壁上に露はして歡喜の眼を放つて見ると、夕霞は何時か奉天城を包み了つた。吹來る風の冷たさに上衣の襟を引立て、居る折柄、俄然丘下に起る大叫喚。續いて響く小銃の音。其の途端、逆襲と絶叫して駈上つて來る味方。「任舞つた。降服と見せて逆襲とは。さても汚なき奴原かな。さりとは茲に一年の武功も水泡に歸して、我が師團の名譽も今日限りか」と刹那に

込上げる無量の感慨に打たれながら、地物に據らんと引きさがる。咄嗟應變の指揮は誰であつたか知らぬが、幕僚の一喝に戦闘員は前に出る。空を切つて來る銃彈が悉く我が頭に集中するかの様に感ぜられる。ひた走りに走り出したが、百米と行かぬ中にもう呼吸が追つて一步も歩かれぬ。羨ましい。某に某はとつと、吾を通り越して先に行つて仕舞ふ。仕方が無さに立止つて見る。と、敵の委棄して行つた麥粉の俵が散亂して居る。是幸ひとこれを楯にべつたりと坐つて喘ぎく呼吸を休め、水筒に口を着けて見たが、生憎一滴も無い。

今少し遠くに行つて見ようか。併し我が脚では五町とは走られぬ。直様敵に追付かれるは必定。此處に一人居た處で仕方がない。何としようかと考へながら、豫て鞘走りを防ぐため縛つてあつた佩劍の紐を解く。あゝ残念、捕虜になるよりは寧ろ腹を切らう。銃聲は益劇しい。日は暮れかゝる。此處で流丸に當つて一人で犬死をするのは愚の極だと考へつゝ、頭を擡げて見廻すと、つい近處に一中隊許の歩兵が畠の畔に據つて伏して居る。さうだ、彼の中に雜つてやらうと分別を定め、屈めるだけ腰を屈めて行く中にも、飛丸身を掠めて幾度か膽を冷す。漸く辿り着いて見れば、地面に伏して折重なつて射

撃をして居る歩兵。予は其の間に挟まつて、板になれ、紙になれと體を平たくして匍匐ハダカふ。
 嘖ウラレたる喇叭が鳴り渡る。「打方止め」と、右の方五六間に伏して居た一將校が號令する。頭を舉げて舊位置の方を窺へば、ほゞ銃聲が收つた。「はてな、逆襲では無かつたかな。何かの間違で、一時打合つたまでかな。さうだらう、それに違ひない。我が司令部にこそ兵力は無いが、右の丘にも左の山にもあの通り無数の味方が居るのだもの、如何に死物狂ひとは言へ、逆襲が出来るものでは無い。やはり降参に相違ないのだと思ふ中、そら來た、敵が右の方に」と怒鳴る者がある。成程五六十の露兵が何か奇聲を發して遣つて來



奉天戰勝の諸將

- 川村 景明
- 兒玉源次郎
- 乃木希典
- 奧保肇
- 大山 巖
- 山縣有朋
- 野津道貫
- 黒木爲楨

る。併し三々五々ぶらりくと手を上下し、何も武器は携へて居ない。「打てく」と予の横の兵が言ふ。「遣れく」と背後の兵が和する。二三發響く。「打つな、止めえ。打方止めが鳴つたぢや無いか」と予は生意氣に左右を制して居る。程なく「打方止め」の喇叭が響いた。（故郷他郷）

二五 春待つ心

相馬御風

六七尺も積つてゐた雪が、いつの間にかすつかり消えてしまつた。解けた雪は解けるあとから、殆ど全く人間に氣づかれずに、或は蒸發し、或は大地に吸ひこまれ、或は流れ去つて、どうして無くなつたか解らぬやうに無くなつてしまつ

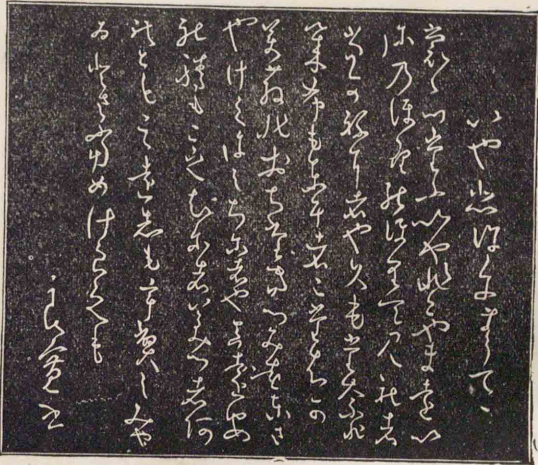
相馬御風
名は昌治
文學者
明治十六年新潟
縣糸魚川町生

た。

幾月かの氷の間深い雪の中に閉ぢこめられてゐた北國の

筆蹟

うでて
もつたふいや
ひこやまをいや
のほりのほりて
見ればたかねに
はやくもたなひ
きふもとはこ
ちちかみさひお
ちたきつみをと
さやけしこしち
にはやまをあれ
ともこしちには
みつはあれとも
こゝをしようへ
しみやるとさた
めけらしも
良寛書



良寛筆蹟

つぎにそこへ集つて行く。そして殆ど躍り出さんばかりの嬉しさうな様子で、土を踏廻る。田や畑の處々に見え出

した黒土の斑點には鷗や鴉や雀が先づ群をなして集る。

彼等の上にもいきくした歡が輝いて見える。

むらぎもの心たのしも、春の日に

鳥のむらがりあそぶを見れば。

かう良寛が歌つた心もちも、雪國に住んだ者でなければ深い味は分らんくらゐであらう。

「長々の月日、雪の下に忍びたる落蒲公英のたぐひ、やをら春吹く風の時を得て雪間々々を嬉しげに首さしのべて」と一茶が書いた若草の歡も、雪國に住む者のしみと味ひ得ることである。大地を踏歩く人の足音の久しく聞えなかつたのを、靜かな夜にふつと聞きつけた時の一種微妙

良寛

越後の隠逸歌人
天保二年(一四九)
寂
年七十四

一茶

小林彌太郎
信濃の俳人
文政十年(一四七)
歿
年六十五

な懐かしみと歡、そんな心の經驗も雪國に住めばこそ味はへるのである。

あづさ弓春になりなば、草の庵を

とく訪ひてまし、逢ひたきものを。

かうした人間味の極致を示したやうな秀歌の良寛にあつたことも、北國の冬と云ふことを全然頭に入れないでは、なかなか理解されまいと思ふ。

全く北國の住民の春を待つ心には、生そのもの、味ひの測り知れない深さが窺はれるのである。(樹かげ)

二六 故山の風光

若山牧水

若山牧水
名は繁
歌人
明治十八年宮崎
縣生

尾鈴山
日向國兒湯郡都
濃村の西三里に
峙つ

私は日向の國尾鈴山の北側に當る峽谷に生れた。家の崖下をすぐ谷が流れ、谷を挾んで急な傾斜が起つて、略一里にわたり、やがて尾鈴の峻しい山腹に續いて居る。

此の山は、南側太平洋に面した方は極めてなだらかな傾斜をつくり、海拔四千何百尺かの高さから海に向つて遠く片靡きに靡き下つてゐるのであるが、私の生れた村に臨んだ側は、殆ど直角ともいひたい角度で切落した斷崖面をなして聳えて居る。無論岩骨そのまゝの山肌で、見るからにこごしい姿であるが、その割には樹木が深い。伐出すにも伐出せないところから、何時とはなしに、其處に生えたいろいろな樹が昔のまゝに芽ぐみ茂つてゐるのであらう。村人

に聞くと、樅の木などが最も多いといふことである。そして春になると、其處に意外に多くの山櫻の咲出すのが仰がれた。

一日二日と雨がつけば、その山腹に、三つも四つも、眞白なみごとな瀧が懸つた。日頃は有るか無きかに流れてゐるその岩壁の水が、雨のために急に相當の谷となり、瀧となつて現れて來るのである。さうして、さういふ日には、實にいろいろの形をした雲が山に生れて、あちこちと動くのが見えた。それほど峻しい山であつても、唯一面の鏡を立てたやうな岩壁となつてゐるのではない。その間には、全體の傾斜に沿ふやうな峻しい角度で幾多の巖が切れて居る。

無論さういふ山肌だから、縦に切れてゐる處はなく、多くは横に切れて疊まつてゐるらしい。そして、その疊まつた岩巖の間から雲は生れて來るのである。

此の雨の日の瀧と雲とが、どれほど私を喜ばせてくれたであらう。子供心にも、常の日の、自分の目の前の山は餘りに峻しく、餘りに鋭く感ぜられたに相違ない。眼鼻があかないといふ氣がしてゐたに相違ない。それが雨の日となると、山の姿が全く變つてしまふ。巖々から湧いた雲が、常はたゞ一面に聳えて居る岩の山を、甚だ奥深いものに見せてくれた。更に雲は濃く淡くたなびいて、幾つかに疊まり聳えて居る岩山の屋根の樹木の茂みを、それらに浮立たせ

て見せてくれた。そしてそれらの雲よりもなほはつきりと白く落ちて居る大小の瀧は、平常の寂しい山を甚だ賑かにし、柔かにしてくれた。その山の雨の日に對する讚美と感謝とからであつたらう、私は中學を出るところまで自ら若山雨山と號してゐたことを思ひ出す。そしてなほそれと共に思ひ出すのは、その山に山櫻の花の咲出す頃の美しさである。

尾鈴からその連山の一つなる七曲峠ナナマヅといふところに到る岩巖が、ちやうど私の家からは眞正面に仰がれた。幾里かに互つて高く聳えた岩山の在りとも見えぬ巖々に、ほのぼのとして咲きそめる山ざくらの花の淡紅色は、躍り易い少

年の心に全く夢のやうな美しさで映つたものであつた。そんな山だけに、樹といふ樹は大抵年代を経た古木であつたに相違ない。淡紅色に浮んで見えるその山櫻の花は、多く、ふくよかな圓みをもつてゐた。枝を張渡した古木にみつちりと咲きしづまつてゐる花のすがたであつたのだ。その圓みを持つた一團の花、一樹の花が、うす黒い岩山の肌はだにそこゝに散らばつて見渡される。北側だけに、山腹には多く日がかけてゐた。そのうすら冷い日蔭に在つても、なほこの花だけは、ほのかに日の光を宿してゐるかの様に浮出て見えたのであつた。

さくら花咲きにけらしも、あしびきの

さくら花
古今集にある紀
貫之の歌

山のかひより見ゆるしらくも。

中學の文法の時間に、引例として示されたこの古歌に無上の憧憬を覺えたのも、やはりさうした心を櫻に對して懐いてゐたからであつた。私の生れた處はさうした山奥であつたために、その頃尋常小學だけしか村になかつた。で、高等小學と中學とをば村から十里餘り離れた海岸の城下町で學んだのであつたが、その中學の寄宿舎にあつて戀しいものは、たゞ父であり、母であり、故郷の山の山櫻の花であつた。その頃幼いながらに詠んだ歌に、その心が残つてゐる。母こひし、かゝるゆふべのふるさとの

櫻さくらん山のすがたよ。(みなかみ紀行)

二七 月雪花

月

白石千別

白石千別
歌人
舊幕臣
明治二十年歿

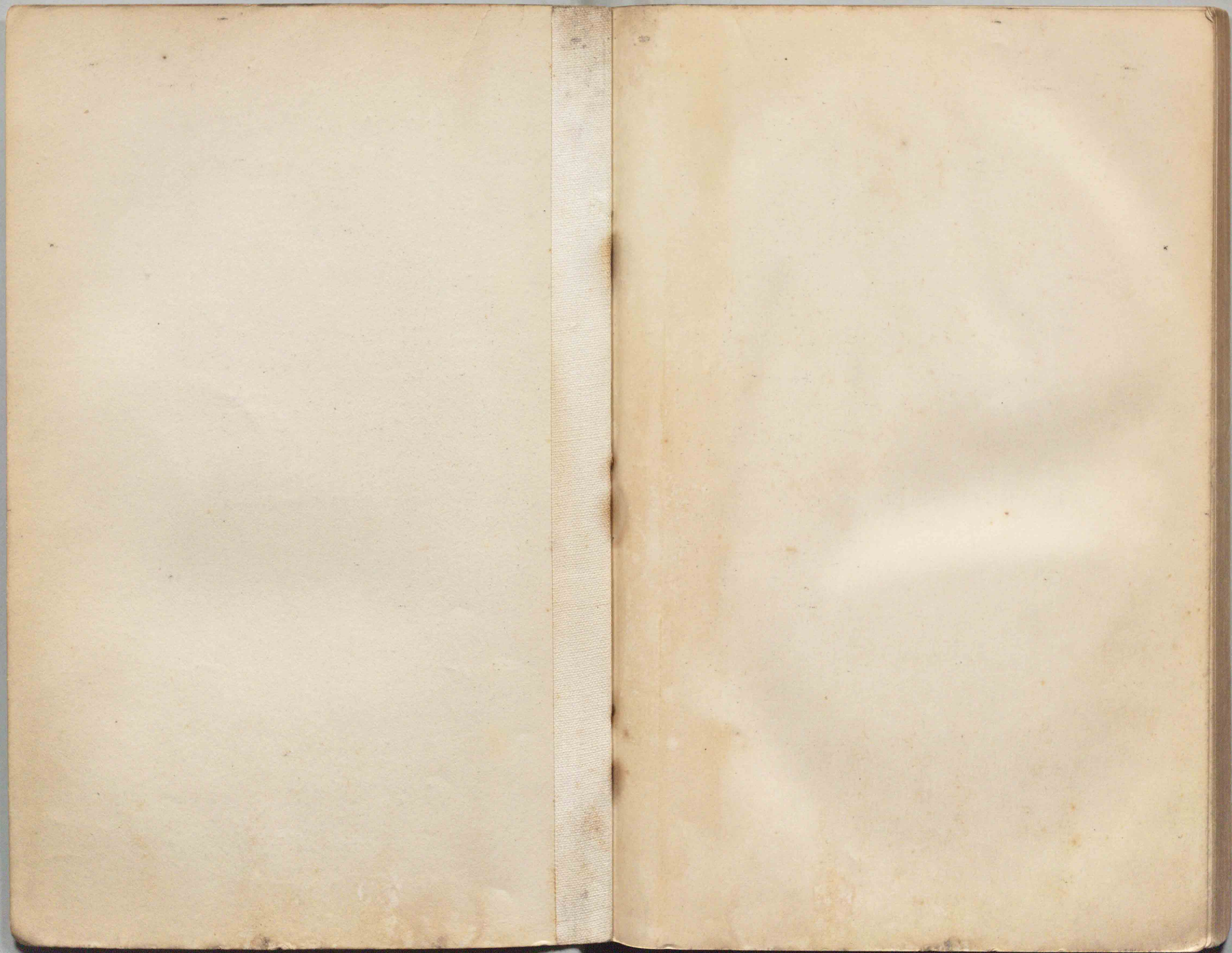
山柿の實の たゞ一つ
残る軒端に、 また一つ
見るもの得たり、 此の朝け
柳にかゝる 三日の月。

雪

足代弘訓

園生の竹の 下折れの
音ぞをりく 聞ゆなる。
降るとしもなく 降る雪の
いかに夜深く 積るらん。

足代弘訓
國學者
伊勢山田生
安政三年(一八二六)
歿 年七十三





22

隅

田

広島大学図書

2000302012



5
2